

野子而如一箸水遷一器相傳之寔哥道之大本此國之至寶厚加之哉忝不堪欣幸而已

延寶九辛酉二月十八日

風 觀 齋 長 雅 花押

一後撰和歌集

卷第四夏歌

足引の山ほとゝます打はへて誰かまさと音をのみそなく よみ人しらす

此歌古今集にも入たり

卷七秋歌下

初時雨ふれは山へそおもほゆるいつれのかたかまつもみつらん よみ人しらす

此歌卷八冬初めにあり重出也

卷八冬歌

題 不 知

秋はてゝ時雨ふりぬる我なればちることの葉をなにか恨見む よみ人しらす

今はとて我身時雨にふりぬればことの葉さへにうつろひにけり

此二首また古今集にあり

神無月時雨斗りはふらすしてゆきかてにさえなとかなるらん

此哥校本になし

此餘よみ人しらすの中に人丸赤人の哥あり其外品々校合を加へらる

典書官本也校本には

此集依仰令書寫之以數本校合及兩三度然者宜爲證本歟

文明八年丑六月十八日 李部卿 邦 高 親 王

右校本雖爲或家秘本予令敢懇望被許一覽仍令校合畢雖經千載請欽勿備他見焉

于時寶曆三年歲次癸酉十月望 治部大輔 平 時 永判

一後撰和歌集標注

契冲阿闍梨註加茂真淵翁後按百花園宗因考異平由豆流増註也

四 冊

契冲師真淵翁の考は古今集の例なり殊にめづらしきは百花園の考異にてこは慶長本と名付る古寫本もてつくりたり流布の本に脱せる歌數百首補入し且本文の異同をあげたり此慶長本なくば後撰集の脱文世に知る人なかるべし由豆流の増註には校正に和漢の書數百部を用ひたり

一拾遺和歌集標註

四冊

此書も圓珠庵契冲師と真淵翁のふたりの考に由豆流の増註せしなり

一後拾遺和歌集

二冊

本集春歌

平兼盛

雪ふりて道ふみまとふ山里にいかにしてかは春のきつらん

此歌校本になし

同賀歌

清原元輔

萬代をかそへんものはきの國のちひろの濱の眞砂なりけり

此歌拾遺集に入たりいかゞ

同戀歌の四

相摸

あやうしとみゆるとたへのまろはしのまろなとかゝる物思ふらん

此歌和泉式部の集にありいかゞ

同

平兼盛

難波瀉汀のあしのちのよにうらみてとふる人のこゝろを

此歌飛鳥井榮雅卿の本になし又戀歌の三に

左京大夫道雅

涙やはまたもあふへきつまならなくより外のなくさめそなき

此歌飛鳥井本にありて本集に不載道遙院本にまたなし

同秋歌

明はてゝ野へをまつみん花すゝきまねくけしきは秋にかはらし

此歌頓阿法師本に不載

此餘の校合飛鳥井榮雅卿は未書逍遙院殿並頓阿法師は墨書右之三本を以令書寫たるを
みる一本に云

以一條法印定爲本書寫之此本者道供法師依夢想道筆一宗匠草子内也

順徳院御本黒表紙云々

貞治第三曆大呂中旬令書寫訖

頓

阿花押

一後拾遺和歌抄

二冊

此抄原本は應徳三年末秋の假名序あり白河院御時通俊卿勅を承り撰之然るに今之流布
本は誤脱の多きを以更に數名の校合あり頗る此編に見易からしむすべて傍書に頭書に
詳にせり原書之奥書に曰

長承三年正月十九日以禮部納言之自筆本書了件本奥書云寛治元年九月十五日爲披露
世間重申下御本校之先是在世相違歌三百余首不可信用件 本其由奥書目錄序

安政五年季夏上木之

通

俊

一金葉和歌集

二冊

本集春歌

山櫻梢の風の寒むければ花の盛りに成そわつろふ

左京大夫經忠

白雲と峯にはみへて櫻花ちれば麓の雪とこそ見れ

右兵衛督伊通

花のみや暮ぬる春の形見とて青葉の下にちり残るらん

盛イ盛宗盛母盛

同 夏之部

卯の花を音なし川の浪かとしてねたくもあらで過にけるかな

源 盛 清

うの花の青葉も見へす咲ぬれば雪そ花のみかわるなりけり

大中臣定長

稻荷山尋や見まし時鳥まつにしるしのなきと思へは

中納言實行

ほととぎす一聲なきて明ぬればあやなく夜のうらめしき哉

藤原成通朝臣

同 秋之部

藤はかまほころひはやと匂はなむ秋の初風吹たゝすとも
今よりは心ゆるさし月影の行衛もしらす人さそひけり
秋ならて妻よふ鹿をさし哉折から聲の身にはしむかと
今はしもほに出ぬらむ東路の岩田のおのゝ篠のおすゝき
河霧のたちこめつれば高瀬舟分ゆく棹の音のみそする
色深き深山かくれの紅葉はを嵐の風のたよりにそみる

同 冬之部

音にたにたもとをぬらす時雨哉楨の板屋のよるの寢覺に
風早みとしまかさきをこき行は夕浪千鳥たちぬなくなり
あらし山雪ふり積る高根よりさへてもいつる夜半の月哉

同 戀歌部

我戀は醜の清水いわてのみせきやる方もなくて暮しつ

皇后宮美濃
藤原家經朝臣
藤原行家
藤原伊家
藤原行家
太宰大貳長實母

源 定信

神祇伯顯仲

源 雅光

俊頼朝臣

しらせはやほのみしま江に袖ひちて七瀬のともにおもふ心を

神祇伯顯仲

ありふるもうき世なりけり長からぬ人の心を命とも哉

相 摸

白菊のかはらぬ色もたのまれすうつろはてやむ秋しなけれは

春宮大夫公實

宵の間にほのかに人を三日月のあかて入にし影そ戀しき

藤原爲忠

吹風にたへぬ梢の花よりもとめかたきはなみたなりけり

源 雅光

人しれぬ戀をしすまの浦人は泣しほたれて過すなり鳥

皇后宮權大夫師時

なこそといふことをは君か言草を關の名そとも思ひけるか那

源 俊頼朝臣

同 雜歌

年ふれと春にしられぬ埋木は花の宮古にすむかひそなき
いかてかは袂に月の宿らましひかりまちとる涙ならすは
よなくはまとろまでのみ有明のつきせす物を思ふ頃哉

藤原顯仲朝臣
平 康貞女
皇后宮美濃

住吉のまつかひありてけふよりは難波の事もしらす斗りそ
 虫の音はこの秋しもそ鳴まさるわかれの遠くなる心地して
 いかにせんうき世の中に炭竈の果は烟りと成ぬへき身を
 罪はしも露も残らす消ぬらん長き夜すからくゆる思ひに
 和田津海の底のもくつと見し物をいかてか空の月と成らん
 よもの海のなみにたよふみくつおも七重のあみに引なもらしそ
 源 俊頼朝臣
 勝 超法師
 覺 譽法師
 藤 原知陰
 加 茂成助
 源 行宗朝臣
 讀人しらす

花くきとちるてふことそなかりける

以上三十三首官本に不載之

攝政左大臣家にて戀の心をよめる

あふ事のなきをうき田の池にすむ呼子鳥こそ我身なり鳥

たのめてあはぬ戀

藤原爲真朝臣

戀しなて心つくしに今までもたのむれはこそいきの松原

藤原親隆朝臣

戀の心を

あくといふことをしらはや紅の涙にそむる袖やかへると

琳 皓法師

いとせめて戀しきとはに播磨なる飾磨にそむるかちよりそへに

讀 人 不 知

以上四首書漏以朱書加筆有之此集相違多々校合す
 典 以貞敦親王眞蹟令讀合訖相違之處以朱付了

又異本に載る歌山乃歌合に戀の心を

隆 覺法師

身のほとを思ひ知りぬることのみやつれなき人の情なるらん

校本に云

此集依 勅命以清本用捨令書寫之數度反校合訖

于時文明 十曆孟夏中旬

從二位

藤原

敦國

一詞花和歌集

十卷 冊

本集戀之部之上

五九六

右衛門督家成家に歌合し侍りけるによめる

いかならん言の葉にてか靡くへき戀しといふはかひなかりけり

藤原頼保

同 雜の下

右兵衛督公行女におくれて侍ける比女房につけて申さする事侍ける返事に讀せ給ける

新院御製

うつるいきのいるをまつ間もかたき世を思ひ知るらん袖はいかにと

右二首本集に洩たり又同じ雜の下に

思ひ出もなき故郷の山なれとかくれ行はた哀れなりけり

大江正言

此歌拾遺集第六に出たり

奥書ニ曰
官本也校本には

此集依仰令書寫之以數本校合及兩三度然者宜爲證本歟

文明十年卯月廿四日

李部邦高親王

一千載和歌集

廿卷
一一冊

本集秋歌の上

前齋宮河内

戀しくて今霄はかりや七夕の枕に塵のつもらさるらむ

此歌金葉の三に入たり

源 俊頼朝臣

雜歌之下短歌の返歌

世の中はうき身にそへるかけなれや思ひすつれとはなれさりけり

此歌又金葉に入たり

同 俳諧歌 題不知

空也上人

極樂ははるけきほととぎししかとつとめていたる所なりけり

此歌拾遺集に入りて仙慶法師詠とあり不審々々

五九七

同 雜歌の中

法性寺入道前太政大臣

谷の戸をとちやはてつる鶯のまつにおとせて春のくれぬる

此歌拾遺集の雜之部に入たり

同 哀傷歌

中務卿具平親王

春くれは散にし花も咲にけりあわれ別のかゝらましかは

此歌詞花集に赤染衛門歌也とす詞不同不審々々

同 戀歌之四

藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらね共また夜をこめておきにけるかな

此歌又詞花集に入たり如何々

同 雜歌之上

清少納言

うはこほりあわにむすへるひもなれはかさす日影にゆるふ斗りそ

此歌後拾遺集に入たり

同 雜歌之中

藤原季通朝臣

いとひても猶忍はる、我身哉ふたゝひ來へき此世ならねは

此歌も詞花集に入たり以上八首重出乃歌也又

同 戀歌の四

藤原清輔朝臣

あふことはいなさ細江の身を盡し深きしるしもなき世なりけり

同 賀之歌

皇太后宮大夫俊成

我ともに君か御かきの吳竹は千代に幾世のけかをそふらん

右二首校本に無之また

同 戀歌の四

藤原清輔朝臣

露深きあさまの野らにをかやかる賤のたもともかくやぬれしを

此歌校本に載せて流布本になし此本集之流布本は序文よりして誤字落字あまたあり

右校本雖爲或家秘本予令敢懇望被許一覽仍令校合畢雖經千載請欽勿備他見焉

于時寶曆四年歲次甲戌陽復院望

治部大輔 平時 永判

一新古今和歌集

廿卷 四冊

官本ニ云 文明十二曆初穗上旬候依仰令書寫遂數箇度之校合畢

權中納言 藤原雅康判

卷第二 春歌之下

古里に花は散つゝみよし野の山のさくらはまた咲すなり 中納言家持

在春雨下花の香の上

題 不知 赤 人

戀しくは形見にせんと我宿にうへし藤浪今さかりなり

在足曳下かくてこそ上

卷第三 夏歌 時鳥の心を 顯昭法師

ほととぎすむかしをかけて思へとや老の寢覺に一聲そする

在有明下過にけり上

卷第五 秋 歌 題不知 惠慶法師

高砂の尾上にたてる鹿の音にことの外にもぬるゝ袖かな

在妻こふる下深山上

右之歌在異本無飛鳥井雅康本

右八代集爲證本以數本再三令校合之畢

文明第十八三月中旬

壯 丹 花 花押

卷第十七 雜歌中 題不知

紀 貫 之

幾世へしいそへの松のむかしよりたちよる浪の數はしるらむ

在みつのえの下今父上

卷第十八 雜歌下

おほかたはあきあへぬ露のいくよしもおらし我身の袖の秋風

在君か代下もしむの上

右之歌在飛鳥井本數本に無之

右集以黃門入道宋世遺墨之本勵膽寫之功畢件本以撰者之眞跡數多之本所被比較之字本寫之々由被書于紙尾尤希有之證本也

亞 槐 藤花押

新古今被直事

春下 太神宮に百首歌たてまつり侍し中に

太上天皇

いかにせん世にふるなかめ柴の戸にうつろふ花の春の暮かた

秋上 同詞

朝夕のをかのかやはら山風にみたれてものは秋を悲しき

以上二首被出之

今此新古今集はいにし元久歌比ほひ和歌所の輩におほせて古き今の歌をあつめしめ

て此上みつから撰ひさためてより此かた家々のもてあそびとしてみそちあまの春秋を過にたれば今更あらたむへきにはあらぬともしづかにこれを見るに思ひくの風情ふるきもあたらしきもわきがたく品々のよみ人高きも賤しきも捨てがたくして集めたるところの歌ふた千々なり數のおほかるにつけては歌毎にいそなるにしにあらす其うち見つかからか歌を入たること三十首に餘れり道にふける思ひ深しといふ共いかてか集のやつれを返りみさるへきおほよそ玉の臺風和らかなるむかしは猶野邊の葉しけきことわさもまさきいさこのかこと月靜かなる今はかへりて森の梢深き色も辨へつべし昔しより集を抄する事は其あとなきにしもあらされはすべからくこれを抄しいたすべしと雖も攝政太政大臣に勅して假名の序をたてまつらしめたりき則此集の詮とす然るを是を抄せしかはもとの序をかよわしもちいるへきにあらず是によりてすべての歌の至惡詠の數斗りをあらためなす然のみならず卷々の歌のかさねて千歌もうちを撰びてはた卷とすたまちにもとの集を捨へきにはあらぬ共更にあらため見かけるはすく

れたるべし天の浮橋の昔しをさゝわたりや垣の雲の色に染ん輩はこれを深きまことに
ひらきつたへてはるかなる世にのこせとなり

此註以六條宮御本寫之重彼撰定之旨尤以龜鑑也

其所被出之歌以朱消者是也此外猶與書本相違事等有之以來所直註皆寫彼御本者也

一本云 斯集當時就無證本聚若干古本遂數箇度比校改正其謬於今者寂可謂秘本隨一者乎

右旨趣且依 繪命具所註也

皆文明十年南呂晦日

從三位 藤原基綱 花押

此編本文之頭書に右兵衛督ナ有家卿ウ定家江戶家隆卿牙以上撰者五人之點以校合する

に各其略字を傍書し飛鳥井家本ハ以朱書及再校可謂精撰也

一新古今美濃の家都登

五冊

本居宣長 著

序に云大矢重門かまなひに美濃の國より來り居て何くれと問ひけることとももの中に

此集の歌共の心はえをなんことにこまやかにとひたつねたるにさとしあけつらひた
る趣をおなしくは國にかへらは家都登に書しるしてえさせよとこえるまゝにかきて

あたふ

本居宣長

歌意を短簡に註解し加ふるに寫誤をよく校正したるかどく多し

一二三奏 金葉集

三冊

此書は後京極良經公眞蹟を以天保九年十月加茂縣主直兄刻する處上下二冊は第三度目
之奏覽本なるを以て三奏之名を冠らしむ附録一冊は直兄主人の考案並後叙を附せり

一新勅撰和歌集

廿卷 二冊

此集流布本誤字闕字至て少し

雜歌之四 風吹は濱松ヶ枝の手向草いく世まてにか年の經ぬらむ

此一首下之句露斗りこそぬさとちるらめ

右之外にさしての相違あらざる也官本に云

右以撰旨真蹟並數多證本等被加校合之御本依勅定令書寫之而三度讀合訖

于時文明十年七月十九日

藏人頭右近衛權中將藤原實興 花押

一續後撰和歌集

卷第六 秋歌上

紫式部

秋の夜は山田の鹿は稻妻のひかりのみこそもりあかしけれ

卷第十二 戀歌二

亭子院にさふらひける女につかわしける

なかき夜を明石の浦にやく壺の烟りは空に立やのほらん 源 嘉種

ほしわひぬあまの苅藻に鹽だれて我からぬる、袖の浦浪 皇太后宮大夫俊成

右之哥校本になし

卷第十六 雜歌の上 後法性寺入道前關白家百首に月

世の中をそひきてみれと秋の月おなし空にそ猶めぐりける

右之歌本集に前參議忠定の歌につき讀人を不載校本に皇太后宮大夫俊成とあり

卷第七 秋歌の下

大納言成通

おしなへて紅葉の色に成にけり時たに染ぬ山しなけれは

在時雨り下みれと猶上流布本に不載

奥書 建長七年五月十六日右筆務終書之功

特進前亞相戸部尙書藤原 花押

奥書

以校 奏覽之本漸々校合中風筆蹟狼籍雖不彼見解撰者之自筆何不備證本哉 祐覺

文永二年四月付屬太夫爲相之

六十八 桑

二十卷 三冊

門 花押

一續古今和歌集

本集秋之上部

寶治二年百首に秋夕

入道前太政大臣

六〇七

なかむれは心に落るなみた哉いかなる時そ秋のゆふ暮

右二句之初めの心をすゝると比較ありしは實にことわりにこそ又釋教の中題しらす天

台座主隆覺

さたかにもうき世の夢をさとらすはやみのうつゝに猶や迷はん

此作者隆覺にあらず澄覺とす

同 羈旅之中 旅の心を

道因法師

思ふ人ありやとへは都鳥さしもしられぬ音をのみそなく

こは道因法師はあらず道圓法師也と其餘落題脱字誤寫を多くたゞされたり

奥書

右和歌集一冊者謹蒙 鳳術不願左道訕諤馳右筆拙遂全部之寫功猶致再讚之比較而已

于時文明十一載黃鐘上澣

台 嶺 釋 准 三 后 尊 應 花 押

一續拾遺和歌集

廿卷 二一 冊

卷第十七雜歌之中に從二位能清を侍從能成とし道圓法師を道因法師と誤寫せし類ひ所

々に校合を加へられ然りといへ共さしての違も無きゆへ贅言せず奥書は玉葉集と同じ

一新後撰和歌集

廿卷 三 冊

本集秋歌之上

平宣時朝臣

たれかまた秋風ならて古里の庭の淺茅の露もはらわん

同 戀歌の一

僧正行意

おのつからかけても袖にしらすなよいわせの森の秋のしら露

同 戀歌の三

順徳院御製

濱千鳥かよふはかりの跡はあれとみぬめの浦に音おのみそなく

同

鎌倉右大臣

我せこそ松浦の山の蔦かつら玉さかにたにくるよしもなし

同 戀歌之四

加茂重員

よなくの枕のちりによそへてもしらせやあましつもるうらみを

右之五首校本にこれなく

右集以數本令書寫校合云々尤可爲證本依 勅命加奥書者也

文明九年十月廿五日

右兵衛督

藤

廿卷

原

雅

康

一玉葉和歌集

此集流布本誤字所々に雖有之全體外集より校合至極宜敷落字等また少々なり

右集以數本令書寫校合云々尤可爲證本以下 前同文

文明九年十一月廿八日

右兵衛督

藤

廿卷

原

雅

康

一續千載和歌集

本集羈旅の中 廿首歌奉りし時

こまかゝる夕への雲はなとなくてあらしにたとるさ夜の中山

同 戀歌三 題知らず

法印定爲 是法法師

相坂の關より奥を尋ねみんこへてかへらぬ道はありやと

同 戀歌五 題しらす

つらきおもせに思ひしる中ならはいとかく人をしたはさらまし

同 雜歌下

何ゆへにそむきもやらてすくすらん心とむへき此世ならぬに

同 春歌下

いにしへの雲井の櫻たねしあれはまた春にあふ御代そしらるゝ

此作者爲教卿にあらず冬教卿也

此集蒙 詔命不日終寫功數度遂校合可被比證本者乎

于時文明十一紀孟夏中旬

權中納言

宣

廿卷

冊

胤

花押

一續後拾遺和歌集

本集秋歌之上

藤原元真

あらし吹太山の里の女郎花うしろめたくもかへる今日かな

同 冬之部

前大納言經繼

とはゝやな小野の炭かまおのつから通ひし道は雪ふかくとも

右之二首校本になし

奥書

右校本雖爲或家秘本予令敢懇望被許一覽仍令校合畢雖經千載請欽勿備他見焉

于時寶曆四年歲次甲戌陽復既望

治部大輔

平

時

永判

一風雅和歌集

廿卷 四冊

本集夏之部

前大納言經繼

あやめ草ひく人もなく山城のとはに浪こす五月雨のころ

此歌は前大納言經信卿の作にして繼は誤寫なりとみへたり此餘は校合のみにて歌に相違はなし

奥書

此集蒙 詔命不日終寫功數箇度遂校合可被比證本者乎

于時文明十二紀林鐘下旬

權中納言

廿卷

四冊

藤原宣胤 花押

一新千載和歌集

本集戀歌一

橘 範 隆

いわて思ふころのうちのしからみにせきあへぬものは涙なりけり

此作者範隆にあらず道常法師也

同 雜歌の中

述懷百首之中に炭竈

寂蓮法師

あすしらぬ世にすみかまのいつまでか嶺の烟りをよそにみるへき

此作者寂蓮にあらず寂圭法師の誤字なりと

同 雜歌之二に洩たりしとて加へらる

惟明親王家の十五首歌に

前中納言定家

天地もあわれしるとはいにしへのたか偽りそしきしまの道

此餘示證上人を永證とし津守經國を國經とせし誤りは擧るに暇あらず
奥書 以官本阿野前大納言實顯卿筆蹟校合了

一新拾遺和歌集

廿卷
四冊

本集戀歌之二

嘉元百首歌奉りける時

從二位 爲

子

聞もらしたれをなこそその關の名そ行あふ道をいそく心に

此歌嘉元百首に無之よし見えたり
奥書

右集以數本令書寫校合云々尤可爲證本依勅命加奥書者也

文明十年十一月廿七日

右兵衛督

藤原雅康

一新葉和歌集

寫

二冊

今茲に擧る處の本集は寛正の古寫にして華族交野家の藏書たりしか賣却ありしを得る

流布本よりは歌數四十五首多し數多により省く奥書の如きは考證家の必要に付全文を擧ぐ慶壽院法皇を注意せよ

斯書南朝慶壽院法皇御在位之時 詔出予叔父中務卿宗良親王被而所令撰也後大王則

宗匠民部卿爲世卿之外孫也 大王母從三位 爲子爲世卿女也 依得付囑 此撰畢作者皆以已逝矣謾現存者

唯而三輩而已所謂上野太守懷良親王右近大將長親 法名朋親 號耕雲 老拙等也 俗名兵部卿 師成親王 到披卷旨

慷慨有餘嗚呼魄雖歸拾泉下名孤在臆上矣故者之骨未腐於土中名先識世上適爲後世被知之者唯和歌人而已々々斯語誠宜哉莫斯詠歌者擧知故人之風騷乎後生晚進之志尤可嗜者此道也道子豈不鞭於教乎

應永卅一年三月 日

釋笠源叟惠梵志之

右

應永卅二年三月日書寫之

于時勢州安藝郡栗直庄南陽寺泉昌庵 行年六十三

同 四月三日以耕雲自筆本校合了此集作者存者謾餘三四人刀皆已畢梅隱祐常中務卿惟

成親王愚拙上野大守懷成親王貞子內親王右近大將長親以上五人而已存但梅隱今年三月三日薨貞子內親王同十二月薨了

以 笠源尊輪之本書寫之但全篇定者刀刀也遇乎慚惶々々

永享十二曆仲春上澣於于周防國高尾山下私第閣禿筆了 桑 門 智 明_行二十七年

以上本

寛正四年十月七日書寫之 一校之 依貞源貴命書之 隱 士 銘 玉_{三十七}

歌合之部

一水無瀬殿歌合 寫 一冊

建仁二年九月十三日戀十五首題七十五番歌合作者

後鳥羽御作名

左馬頭親定 左大臣良經公 女房宮内卿 大僧正慈圓

權中納言公繼 俊成 卿女 大藏卿有家 左少將定家

上總介家隆 左少將雅經

講師 定家朝臣 判者 釋阿

卷跋に なかれそふなみたそすしむ水莖の跡とふ人のあらしと思へは

文明九年九月仰左少辨元長令書之同月廿一日於燈下校合之猶不審多以證本可校也

披 察 使 親 長 花押

一齋 宮 歌 合 寫 一冊

天曆十年二月三十日作者忠見兼盛中務ノ三人ニシテ十二番也 題ハ 霞 春風 梅花

鶯 春雨 若菜 櫻花 柳 欸冬 藤花 不會戀 會戀

一撫 子 歌 合 寫 一冊

天曆十年五月廿九日左衛門督のみやすむところの御方のこたちのなてしこあはせの歌

左中務君右兼盛合三番六首なり奥に

これはあはせぬうた

年さへてうめのをるすになてしこの花さきぬとてめつるなるべし

一宰相中將君達春秋歌合 寫

一冊

應和三年七月二日大納言忠家卿作春秋くらべの百首にして卷頭は

咲花も人のこゝろものとかなる春としりせは春をまたまし

一源順馬名合

一冊

左右十番二十首の和歌なり題は真名にして片假名を傍書にす

一光明峯寺歌合 寫

一冊

貞永元年七月於光明峯寺攝政家題寄花戀 鏡 弓 玉 枕 帶 絲 莖 船 網 作者は

左 權大納言基家 春宮權大夫良實 資季朝臣 右衛門督爲家

前宮内卿家隆 兵部卿成實 家長朝臣 頼氏朝臣

親季朝臣 知宗 中宮少將

右 民部卿典侍 權中納言定家 信實朝臣 正三位知家

忠 俊隆 祐源家清 下野

行能朝臣 中宮但馬兼康

判者 權中納言定家 百十番 二百二十首也

此歌合奥末に百首題あり奥書

于時寛文五歳首夏下旬書寫之一校合了 右近衛權中將 藤

原列

一將軍家十五番歌合 寫

一冊

權大納言源義尙卿 詠

奥書に云 飛鳥井 榮雅 此歌合文明十四歳七月上洛之時從大納言殿給短冊三十枚可獻題之由蒙

仰之間則進之儀被支配三十人被成歌合云々後七月於比叡山東坂本旅宿依仰早速加判伺

不及思案任筆恐怖云々

一道堅法師自歌合

寫

一冊

此一帖獨吟之五十首左右廿五番也跋文作者也其未

明應六の年しわすのはしめの八日これをしるす正六位上 凡 河 内 俊 恒

右一冊道堅法師自歌合也件本從親王御方申出書寫了彼本後柏原院勅筆也末遂一校者也

于時永祿十二曆夏六月上八日 正五位 下行左近衛權少將源通勝

以右之奥書本書寫校合了 幽 齋 叟 玄 旨

一建保職人歌合 寫 一 冊

題は月と戀にして廿四番歌合也作者及び書工とも知らず後年甘露寺親長卿之職人歌合
もあり混ずる勿れ伊勢貞丈曰去年北村春水翁之物語に職人歌合はあまた品ある物にて
と云々又異本あり校合するに歌並判の詞は同ふして繪は異なり書工別人なるべし又歌
は飛鳥井二樂軒筆書名の不知もあり

一百首歌合 寫 一 冊

十市兵部大輔遠忠 詠 無名氏の假名跋あり作者は大和の人ゆへ詠歌多く和州の名

をよめり

暮 春 水 よしの川春もとまりて行水にちりて吹來る花のしら雪

花 漸 盛 吉野山麓は花の奥深き櫻にのこる峯の白雪

三 輪 山 尋ねはや人に知られぬ花も世になへての春をみわの山かけ

判詞すこしつゝ加えたり

一虫 歌 合 一 冊

木下長嘯子 詠 卷首に自序あり左右十五番にして判者藪本之墓と作名す判詞多く

ふ奥書但し梓行の時也

元祿のほしきのへいぬにやとる霜降月中の八日

一職 人 歌 合 寫 一 冊

烏丸大納言資慶卿 詠 書者狩野永徳筆左右二十四番歌は題月

卷首 醫師

村雲のかゝれる月のくすりにはよものあらしそなるへかりけり

一夜 燈 集 寫

一 冊

此集は歌合類十部を寄せたるなり

三十六人歌合 歌仙之歌尤號秀逸之歌三首づゝ俊成卿被註置了奥一首者近衛尙通

公被書加訖

新卅六人撰歌合 後鳥羽御撰一人三首宛

新三十六人歌合 一人一首宛自定家至丹後

職人歌合 題月に戀卅六番判詞あり

職人歌合 烏丸光廣卿作判詞なし歌二首あるあり

秋十五番歌合 定家卿作

十二月歌合 定家卿作

五行歌合 定家卿作

後京極攝政良經公

十二類歌合 水無瀬河釣殿當座六首歌合

一 荷田在滿家歌合

加茂真淵 判 清水濱臣 校

此歌合は荷田在滿家にて催されしにて判者加茂翁なり真淵の歌合の判ぜられたるは此外にはなしとぞ判詞の跋言尤奇絶なり附録には真淵翁春道大人のもとにて哥の會ありしありの人々の歌に真淵翁の評せられたるをあつめて清水濱臣校正して附刻す其評詞卓絶にして後世の評言と異なる事多し

一 幕朝年中行事歌合 寫

三 冊

北村再昌院法印季文作

判者 桑名少將定信朝臣 註者 堀田攝津守正敦

天保十三年八月朔日季文法印假名序文政癸未五月林大學頭衡漢字後叙

凡例に云此百首歌合は貞治の年中行事歌合に習ひて五十番とす徳川氏執政の中正月より十二月にいたりて月次に其式の次第を遂てこれをたゞむ一年兩度に及ぶものはそのはしめをとれりまた定例の外臨時の行事ありこは臨時の部におさむ題の如きは左右にて百題なり卷端は

左 兎 羹

ありにあへは千代のためしと成にけり雪の林に得たる兎も

右 屠蘇白散

延といふ千世のくすりの豊みきを君にさゝけて祝ふ今日かな

天保十三年八月朔日淨書同月四日獻上

卷一壹番より十八番まで卷二十九番より三十四番まで卷三十五番より五十番に至る
奥書並に再記あり

増補群書一覽 卷第十

百首之部

西京 西村兼文編輯
文學士 入田整三校訂

一遠 島百首 寫

一冊

土御門天皇 御製

此御百首ハ土佐ノ遠所ヨリ宮内卿家隆ノ許へ遣シテ點シテ被合點ニヤガテ治部卿定家ノ許へ遣シテ幼ナキ人ノ詠ミタルトテ被合點ノ時所々言葉ニ書テ誰ニガ歌ト疑フ
懷舊ノ御歌

秋の宮さくもりむかへて雲の上になれにし月も物わすれすな

裏書ニ曰サレハコン唯事トハラホヘス候ハサリツル物ヲ淺間敷ヲキイタサレマイラ

セニケリ己以露顯感涙千萬行淺間敷タワ事トモ書付候淺間敷候早々可被破失候
懷舊御歌返事 定 家

あかさりし月もさこそは思ふらめふるき涙もわすられぬ世に

スグレテヨキ歌ニハモロ點ヨキニハ片點宜敷ニハ點ナシ家隆ノ點ハ黒シ定家ノ點ハ
赤シコレヲ見ルベシ云々

奥書
文明第十二曆林鐘十日於江州甲賀郡柏木卿書寫之但此本不審之事等在之以證本可直
付者也 葉守神主 甲可 宿禰 永賀

一壬辰百首 寫

一冊

順德天皇 御製

此御百首ハ貞永元年ノ御製ニテ嘉禎三丁酉年秋定家入道明靜ノ許へ佐渡ノ所在ヨリ
進セラレシヲ又隱岐ノ御遷所後鳥羽天皇へ進セラル、處也墨點ハ後鳥羽法皇朱點ハ
定家卿卷首ノ卷 春

風渡る春の氷のひまをあらみあらわれいつる鴉の下道

奥書

寛元六年極月十六日桃燈一夜馳筆畢々々

藝州 刺 史列

和歌ノ浦に契りふりにし蘆田霧もほかに鳴音は聞人もなし

一麓忽百首 寫

一冊

大僧正慈圓 撰

此編ハ左右百番ニテ二百首ナリ左ハ前關白忠通公右ハ大僧正慈圓ノ詠ナリ

一源氏百人一首

一冊

黒澤翁滿 撰

此書は定家卿の小倉の色紙にならひ源氏物語の中より百人を撰みおの／＼其名歌一
首づゝを出して兒女子の分り安きよふに註釋を加へ本書は大部のものなれば先此書
によりて源氏の大意をさとるべき爲にす

一長綱百首 寫

一冊

散位長綱 著

此百首ハ定家卿ノ點詞アリ又奥ニ寄名所述懷十首ヲ附ス卷首ハ早春雨ノ題ニテ

春雨のふるや岡邊の松ヶ枝に残るともなきうその白雪

奥書

此一卷之始之返報之詞並歌之裏書等祖父京極中納言入道定家公眞筆無疑候往時嘉祿

二年九月十六日今者嘉曆二年二月廿三日拜見之返々哀になつかしく存候

へたてくる昔の跡の水くきは今もなかれて涙とそなる

人のあやの親のかきたることの葉を子のこの世までみるもなつかし

爲守法名也

曉 月 敬 白 在判

一四字題百首 寫

撰者詳ナラズ

此百首ハ題三首ヅツ詠アリ依テ三百首ナリ卷首關路早春ノ題ニテ

たのみこし關の藤川春きても深き霞のしたむせひつゝ

あつま路に春や來ぬらん關の戸の明れはかすむあしからの山

やすらはてこへける春のたよりとや霞の關の名にも立らむ

一國冬百首 寫

神主從四位下津守國冬 著

此編卷首ニハ秋日陪社壇同詠祈雨百首和歌トアリ其卷端ハ雨中立春ノ題ニテ詠ル

きのふみし雪引かへて降雨のみのしろ衣春は來にけり

右之内廿首者非愚筆三井寺常林院天玖十六歲之時之手跡也近年現學院僧正ト號ス

一日吉奉納百首 寫

沙門正徹 書

此書ノ卷首ハ立春ノ題ニテ

立返る春の日よしの影高き山はふしのね雪もけなくに

奥書

享德二年三月十一日書之以謹奉納

休 山 叟

享德二年三月六日申時參籠日吉大宮彼岸所詠此百首以至法樂明日七日赤日之間今日六日夕卷頭以下四五首詠之自七日九日之間依物忘子細不事行雖然九日之入夜詠終了

一難題百首 寫 一冊

大納言爲家卿 撰

此百首ハ爲家卿爲 朝臣及ビ阿佛尼ノ三人詠ズル處ニテ即一題三詠歌三百首

一冬日百首 寫 一冊

權大納言實隆 著

此書三條西道遙院ノ詠出ニテ卷頭ハ早春

木のめにもまたみへそめぬ春の色をたれかこゝろの花にわくらん
奥書

此一卷先公道遙院筆蹟不慮一覽忽濕懷舊之袖者也

于時永祿三年暮秋下泝

稱名野 釋

一世中百首 寫 一卷

荒木田守武 著

此集總テ上ノ句ニ世ノ中ノ五文字ヲ置クマ、三句又ハ五句ニアル百首ノ中一首贈答有

世の中に錢たにもたは藝能もいらぬとわれは思ふべくなり

トアル返シニ

世の中に藝能ありて其上に錢おは人のもたぬものは

卷後ニ

世の中は大永五年長月のかのへさるの夜百首よむなり

一吉野百首 一冊

文祿三年二月廿九日關白秀吉公和州吉野御遊覽ノ時御會兼題五首詠者二十人其人々ハ

豐太閤秀吉公

關白秀次公

右大臣晴季公

權大納言親綱

權大納言輝資

權大納言家康

權中納言秀保

權中納言秀經

參議中將秀家

參議中將利家

右衛門督永孝

左近中將雅枝

侍從藤原正宗

准三后道澄

内府入道常真

法印玄旨幽齋

施藥院全宗

里村法眼紹巴

里村法橋由巳

里村法橋昌叱

花の願

秀吉公

うつしかと思ひおくりし芳野山花をけふしも見そめぬるかな

不散花風

關白秀次公

かた分てなひく柳も咲いつる花にいとほぬ春のあさ風

瀧の上の花

大納言家康

花のいろ春より後もわすれめや水上遠き瀧のしらなみ

神前の花

中納言秀俊

よしの山奥の宮居にたちつくかすみを花のいかきなりけり

花の祝

左中將利家

よしの山花のさかりの久しきに君かよわひはかきりあらしな

此書准三后道澄織田常真公ノ筆蹟ヲ以テ梓行之

五冊

一百首異見

香川長門介景樹 編

文政九年之秋平直好筑前守中臣連胤ノ假名序次ニ平景晃漢字ノ序菅名節ノ後叙

此書定家卿小倉百首ノ註抄ニシテ卷端ニ總論ヲ載セテ次ニ歌解ヲ詳ニスル事先抄多シ

ト雖モ此記ニ及バザル遠シト云フベシ

一冊

一百人一首新抄

石原正明 註

世ニ百人一首ノ註アマタアレドモ別ニ一ツノ所見アリテ先ヅ一首毎ニ句ノ間ニ註ヲ

加ヘ其末ニ一首ノ大意ヲ俗語ニテ釋ナシタル抄ナリ

一冊

一聖廟御法樂百首

寫

元祿七年五月廿四日禁裏御月次也寄人ハ

左大臣兼源公

中納言通躬卿

從二位實種卿

右權中將實陰

左權中將公前

左權少將量通

少納言時光

以上七人也

一鷹百首和歌抄

寫

一冊

後西園寺相國實兼公 著

此抄歌ニヨリ抄ナキモイト多シ又中世鷹流行ハ

百敷の日なみのにへにたてんとや片野の禁野狩聲とする

抄ニ云内裏へ毎日鷹ノ鳥ヲ備フ六齋日ヲ除ク也交野禁野同前也日次ノ贊ヲ奉ル依テ

禁野ト云リ宇多野ナド禁野タルベシトアルヲ以テモ其盛ナルヲ知ルベシ

奥書

此一冊者十二代祖後西園寺相國實兼公作依御所望書寫畢不可説候

判

此御奥書者西園寺大納言公益之自筆自判疑無之者也

寛永五年八月十九日

花山院中納言

永原土佐守殿

但シ此抄ノ撰者ハ分明ナラズ

家集之部

一菅家御詠集 寫

一冊

菅神御詠

此御集ハ總計四百廿一首ニテ卷頭歌ハ

さのふまで雪氣の空のいつの間にけさは霞に立渡るらん

卷末に夢想神詠十七首を載す奥書に曰

聖廟御詠歌以北野實成院明順自筆之本書寫也

長享三年己酉正月初四日

天文八年三月廿八日以堺表松之本書寫了

此一冊多聞山落城之刻不慮感得尤秘藏世此時歟

元龜二年五月 日

一 實方朝臣家集

一 冊

四方歌垣標注校正

此家集世に傳われる本は誤字脱文のみにてよみがたきものなるを古寫本の世に希なる本を得て校正しかつ此集にもれたる歌の世々の勅撰家々の聲聽などに載せたるをあつめて附録せり標注には古事及び語釋等をも悉くあげ其詠歌の意を克く解しやすからしめたり

一 曾丹集

一 冊

曾根好忠集

此家集はふるく下河邊長流校正されしを契冲阿闍梨の自から書れし本のあるによりて外に古寫本三本をもて源躬弦平由豆流藤原寛光三人の校正せり

一 和泉式部家集

四 冊

此書は世に流布する和泉式部集和泉式部詠るといへるものゝ類ひにはあらずたへて世

になきものなるを平由豆流の古くもてる本に平春海の自ら書る本と細川玄旨法印自筆本藤原實富朝臣自筆本外に和泉式部集と名付るもの二本とをもて校合しぬ殊に續集二冊は世にめづらしきものを藤原元雄のもてるを原本として校註す本續二集共に和泉式部の自撰なる事疑しからぬものなれどいかなるにか和泉式部續集と題せりそをいぶかしとしてけつりはぶくは面目を失なわん事を恐れたゝ原本のまゝに置よし見えたり和泉式部は世の人知れるが如く歌は小町伊勢にもおとるまじく殊に比頃の女の秀才なれば和漢にわたりたる古事どもおほくよみいでたるを見ばおのづからに學問の一助にはなりぬべししたゞし其不徳の闕けたるは歎くべし

一 覺性二品親王集

寫

一 冊

卷端出觀集と題す小序あり

春の部溪流落花の題に

かほる香を篋樋の水に先たてゝ流れそよとむ谷の櫻は

門跡傳曰覺性法親王本名信法又號泉殿御室大師十二世法皇八世紫金臺寺鳥羽院第五皇子母待賢門院大納言公實女大治四閏七廿生保延元三二十七入室七歲同六六廿二出家十二才保元三三一直叙二品三十歲仁安二十二十三初任法務給同日賜綱所貞永元寂四十八歲廿九歲御弟子入寺歌人也

仁和寺御室第八世也

一忠度朝臣詠歌集 寫

一冊

薩摩守平忠度 詠

立 春

東路や一夜のほとに來る春にいかて先立し霞なるらん

典

右の本は薩摩守忠度朝臣俊成卿之許へ遣し傳りし自筆の本を大樹より出され兵部卿

宗綱卿にかきてまゐらすべきよし仰らる然に予彼卿の學庫に行て後世の證本にそな

へんか爲みしがき筆にまかせてうつしとめよみあわせ侍りけるとなむ

文明十六年三月の中の三日

羽林藤原の基春

一金槐和歌集 寫

三冊

右大臣實朝公歌集 寶曆五年やよひ賀茂真淵の假名序

此序に此公の歌にたけ給ひし事は藤原の定家卿にならひ給へりといふは覺東なき證をあげ又歌に初なる中なる末なるある事をのべ本集の歌に其しるしをつけまた誤りを正し注を加え假名違を多く校合しぬ其一二を書す

朝霞たてるを見ればみつのえの吉野の宮の春は來にけり

後世水の江の吉野とよめるは何書にもなき詞也此公もさる誤を傳へ給ふにやされど此歌のさまを思ふにいにしへにこそよりわめさらは三吉野の吉野とつけしは古事記よりの例により給へ

蟋蟀なく夕くれの秋風に我さへあやなものそかなしき

蟋蟀は萬葉にこほろきとよむ事と見ゆかを誤てはやくよりさりくすとよめり

雪つもる和歌の松原ふりにけりいく世へぬらん玉津しまもり
此浦を和歌と書て歌の事とすると笑ふに耐ぬ僻言なり以下略之

一李花集 寫

二冊

一品宗良親王御集

初妙法院尊澄法親王母從三位爲子後醍醐天皇二皇子中務卿征夷大將軍也此集延元の初
めより明德二年十二月に到る迄諸國に御流寓中殊に遠州信州に於て毎度御戰爭中之御
詠及ぶ北畠親房卿二條爲定卿との贈答多し

東夷を征すへき將軍の宣旨下されて東山東海の邊りに籌策をめぐらし侍るひまに
題をさくりて哥よみ侍とて寄海祝を

四方の海の中にもわきて静かなれ我おさむへき浦の浪風

於遠州井伊谷薨去號冷湛院近時祭井伊谷神社

此本書 先師兵部卿師成親王出家號惠梵筆蹟也

教弘相傳之昔享德疎元仲冬廿日多々良朝臣 判

右以來以本書寫之但彼寫本於防州大内文庫之抄物取出之次卒爾令借用半日馳筆之間
落字等多く猶重而 以証本可加校合者也

干時享祿四曆拾月廿七日

兵部少輔

中原

遠

忠花押

一夢想國師和歌集 寫

一冊

此集は策彦和尚之自筆にして妙心寺大通和尚之所藏なり哥數八十七首あり

一蜷川親元詠草 寫

二冊

宮道新右衛門號智蘊歌集

蜷川氏は伊勢家の附屬にて此集は文明四年正月より同五年中の詠草也卷頭の歌

天津日の霞にこもる今朝よりや春の光を世にひらくらん

常祐俗名貞親四品去廿一日文明四年正月子辨若州にて入滅廿七日聞へしか廿九日比叡山東塔

北谷にて葬送の儀二月朔日侍りし不慮に供なし侍る心の中に思ひし

大比叡にうつささりせば又もみしいつる渡瀬の山の月かけ

彼葬所之前星輪院貞譽法印墓所の傍也

一毛利元就家集

寫

二冊

近臣大庭加賀守賢兼書あつめしに聖護院道増准后御覽じて三光院實澄公判者せしめらる下巻發句をば紹巴に判者せしめ給ふ處なり元就朝臣は集外歌仙にも入られし歌人も此集の中に

けふの日もよしさは暮よくれてこそ枕もからめ花の下かけ

兼文云大庭賢兼は舊大内義隆に仕へ和歌を以其比九州中國に知らる陰徳太平記に載る

一武田晴信集

寫

一冊

大膳大夫源晴信入道法性院機山信玄の和歌集にして總計三百七十八首あり

早春山

今も猶雪氣なからにみよし野々山にや春の立初めけむ

淺間明神の神木といへる櫻を

移し植る泊瀬の花の白ゆふをかけてそ祈る神のまに

一元和帝御詠草聞書

寫

一冊

後水尾天皇御集

卷頭 立春

梓弓やまとの國はおしなへておさまる道に春や來ぬらん

又一字烏丸光廣卿へ御談合御謙退故に一首さし光廣

ひらけ猶文の道にそいにしへにかへらんあとは今ものこらめ

春 二百十八首 夏 八十六首 秋 二百卅首 冬 九十首 賀 四十三

首 羈旅 十三首 戀 百三十四首 哀傷 卅三首 雜白 四十九首

釋教 十八首 神祇 十首

總計 千二十三首也

一 靈元法皇御集 寫

卷末 寄民祝國

春の色のあを人草そなひくめるむへやす國ののとかなるよに

春 六百五十首 夏 二百八十九首 秋 五百十一首

冬 三百四十六首 戀 三百八十三首 雜 三百八十七首

合計 二千五百六十六首也

一元 陵 御 記

靈元天皇御集 嘉永元三月板倉伊豫守勝明假名序

此御集は享保六年九月廿七日に初り同十六年十月十八日に終る盡く修學院御山莊の御記を集め其御當座之詩歌をも載せられ和歌を旨とす

甘雨亭 藏

一貞 德 家 集

六 卷

版

松永長頭鷹貞徳 集

一名逍遙愚草門人以悦之輯也延寶五年十一月十五日以悦八十二歳の序あり貞徳一世の事蹟あらゝ述る連歌を捨て此門に入らる以悦また和歌の道を此翁に學びて其比名ある人也既に此集の中に

病にふして限りなかりしか又をこたりかちに侍

ければ柿園の菊をつみよて

我園の菊おしみれば露の命又この秋もきへそかへれる

かたわらに侍りて以悦

桃を得し九かへりの千世もつめ又此秋の白喜久之花

此集四季戀雜すべて三千餘首あり

一里 村 立 仍 集 寫

連歌師法橋玄仍 集

一 冊

雪 中 若 菜

いかてわれのはらの雪にあとつけて下もへわたる若菜つまし

尾 祝

千世ふへき君かかさしにこのはるそ手折そめつる宿の梅か枝

一 古 學 先 生 和 歌 集

一 冊

仁齋伊藤維貞 集 元祿癸未のとし二月中旬自跋

此集總計二百六十八首之内點六十四首其内諸點七首の中に殊に面白く覺へたりしは

初冬の比北山に雪の初てふりけるをみて

今朝は早都の空も冬めきて遠き山邊に雪ふりにけり

一 光 榮 公 集

寫

三 冊

烏丸内大臣光榮公 集

此集題立普通の如く奥に元文三年十一月大嘗會悠紀方近江國風俗和歌十首同御屏風六

帖和歌十八首及文六編雜の中享保十五年十二月武者小路實蔭公七十の賀に

千世の影猶木高かれ年を経てはるへとたのむわかか浦まつ

一 卜 山 集

寫

二 冊

烏丸大納言光胤卿 集

卜山は其法號なり此集八百七十五首あり

立 春

明るよりのとけき光り敷島の道もめくみの春や立らん

霞

朝つく日春をみとりの霞にも色そふめくみあふく宿かな

一 自 撰 歌

寫

一 冊

本居宣長 集

此集は安永五年に始り天明三年に終る卷首

關路 鶯

六四八

鶯の聲も霞をもる春はゆく人とまゐる相坂の關

一一 村 薄

二 冊

高野東根 集

大江春平の假名序上卷に長歌下卷は文詞にて日記記行あり卷首元日

長閑なる春まちつけて國の名の浦安いはふけふの樂しさ

一二 草 集

三 冊

松平越中守定信朝臣 集

卷一 よもき 百七十三首

文化四年冬自序享和の初め比より書記しぬ

うさものも程へて後はなつかしき面影みする霜のよもきふ

卷二 むくら 百二十八首

文化の初め比より致仕までのかきとむ

ひとかたにいとひなはてそ八重葎これもみとりの春雨の空

卷三 あさ知ふ 六百六十五首

致仕の比より文政七年の比迄しるしぬ

柴の戸は人こそとはね淺茅生の末葉の露も月はいとほす

奥書

文政十年十二月十三日定和あそにまいらす毎卷定信朝臣の自筆をもて梓行す以上九

百三十六首

二 冊

一 稻 葉 集

本居大平 集 文政七年四月三井高匡序

此集上卷六百十一首下卷五百二十六首あり

燈

ともし火の影にむかふもまはゆしな書みても猶くらきころは

六四九

一松戸詠草

桂溪法師集

一琴後集

平春海集

此翁の歌は世の古學家之歌とはかわりて萬葉集の詞を用ひすやすらかにして深く味あり二篇四冊は文集なり翁はわきて文詞にたくみにて心をもろこしにかゝ詞を爰にとる一家の文尤も奇絶たり

一小野古道家集

古道は縣居眞淵翁の高弟にして和歌は殊にたくみなり尤も短歌をよくせり此家集は清水濱臣の校合する處よく正したり

一桂園一枝

香川長門介景樹集

六五〇

四冊

八冊

一冊

三冊

此集拾遺二冊あり嘉永二年春渡忠秋之序

一大努左

中川望南亭自休述自序あり此篇は桂園一枝より九十首の歌を拔萃して光彪の難に自休の答へし也天保四年六月廿一日しるす由奥書に見えたり

一景山公吟咏抄

水戸贈大納言齊昭卿集

天保二年正月より同十四年四月に終る其間和歌百七十二首詩七首ありて贈答御家來へ下されたる歌多し戀歌は一首も見へず且風流の詠も希なり

秋懷舊

過し世の盛りを今も喜久の花忍ふたもとにおける露かな

進恩盡忠と銘したる兜を冠りて

八千歳も限りしあれば身を捨て朽せぬ名こそ世々に傳へむ

一冊

一冊

一歌城哥集

四冊

六五二

小林田兵衛元雄 集 嘉永二年暢月篠崎粥漢字序

藤原元雄字子駿號歌城は箴下之士なり

一蒼山和哥集

二冊

松園蒼山 集 元治元年春賀茂縣主成麗序難波梅子の跋

此撰者は賀茂直兄之門に學びし人也卷末は安政二年霜降月廿三日新造内裡遷幸の長歌あり

上 四百九十三首 下 四百卅六首 長歌 九首

卷頭 立 春 霞

今朝みれば神代の春の道かへす霞初めけり天の香久山

一桂 蔭

二冊

渡忠秋 集

八田知紀之序慶應三年八月源包智後叙元治元年三月三日松浦道輔所撰揚園記忠秋之男純の附跋

一可々樓遺稿

一冊

河本延之 集 慶應三年長月沙門蓮菫假名序

此集總計一千二百七十二首也卷末祝

限なきみよにつれても長かれと思ふは人の命なりけり

歌學之部

一秘藏抄 寫

二冊

凡河内躬恒 撰

卷首古今打聞躬恒撰之とあり歌の本とすべき事四十一條短歌旋頭歌俳諧歌以上五十五ヶ條朗詠の部七條十二月異名の歌年の賀千早振の事四義真澄の鏡の事鳥獸草木雜以上廿八條富士十名等此抄和歌の道に志あらん人は必ず見るべきなり心得の事多く各々歌

をそへて初心にも能く意得すへし

一御聞書寫

一冊

藤原基俊 撰

此篇は和歌のよみかたより假名の事歌をよまむ心得の事題の心得の事病をさるべき事長歌短歌旋頭混本廻文隱題折句疊句俳諧等の事禁忌の事はとかるべき事名所并ことはの事歌合の事其餘心得の品々

典

右秘書者愚老以一身之才跡註置也上古哥仙髓惱口傳雖如雲霞徒書詞盡心更最要之器

故爲未代嬰兒註此一卷大綱淺深不可出此處和哥者全依教訓已讀之然而不存此趣意有諸病之科爲除其科撰之者也潜粹心底不可及他見穴賢々々

左衛門 佐基俊 在判

師匠より相傳の秘書一卷譲り奉りて御心得のためにて候是は羽林定家卿より外は人于時中將々名をだにきかず深く函の底にかくして披露あるまじく候あなかしこく

釋 阿 判俊成卿也

年比淺からず此道に志の候われける時にいまだ家の人にも名をだにきかせず候ひしをゆるし奉り候子一人より外はゆるさるまじく候也歌の秘事多しと申せ共是程深き淺き心得やすき物は候わず住吉玉津島の御利生のおぼし給てよあなかしこくひろふなくひし思われまゐらせ候

藤原氏女俊成卿女の尼御前

此秘書は子より外にゆるすまじき秘事にて候を一子もなき故に貴殿を子としてゆづり奉り候是を御覽せむたびごとと思ひ出してとぶらひも有べきよし申されしにあわれとかやのこりなくゆづり奉る處也穴かしこく 妙 阿判

書を相傳せんとして起請文をかき侍り左右なく書うつさせゆるす事は候まじく候無心の人書寫すべからず然るあひだかよふに書とむる物なりあなかしこく

起請文の事

爲

氏判

正安元年二月十七日

一源家長記 寫

一冊

作者家長は建仁元年十二月後鳥羽天皇和歌所を置いて此の源家長を開闢とせられ藤原清範鳴長明藤原秀能を寄人にし是より五年目元久二年に新古今集を撰はれしをもても其比和歌の達人なりしをしるべし此書は建久九年正月の比より承元元年十二月に至るまで節會公事佛事を始め其規式を記し和歌の贈答殊更に多く其比は名人ぞろひにて其歌は世々の撰集に載せらる少將雅經四位ゆるされて少將にとゞまりたりしかば申つかはす

三笠山雲井をかけて木たゝかれはつ椎柴のはるの行末

又家隆朝臣宮内卿になりて侍るに申つかはす

宮のうちをけふふみゝても敷島の道のおくしるしるしならずや

一後宇多院勅撰口傳抄 寫

一冊

此本は後宇多院の御筆を染られて故萬秋門院にまいらせらる勅撰御百首進上口傳又明月の懷紙の事人丸の影の事を載せらる卷の奥に正應六年三月一日かきて深く箱の底にあさめて末の世に傳るべしゆめく人にもみせられまじく候とあり

一延慶^{爲世兼}兩卿訴陳狀 寫

一冊

古今作者の内源當純は常純の誤り實の諍論次に新古今集以降加撰者不遂其節天亡不吉の論より虚詐の相論撰集に入り不拘官位の淺深不依嫡庶の高下例の事寂蓮有家卿早世の事合點付墨の事新古今撰者の内雅經朝臣の事相傳文書の事爲兼相傳の證本の事貫之自筆本不審の事爲教卿不爲撰者事花山院御自撰拾遺集の例可爲禁忌の事以上勅撰の事に依而兩卿諍論を勅裁あり卷末に阿佛尼の書狀を載る是爲氏勅撰を受給りよろこびの文なり

右一卷爲世卿奏狀摘要抄の所謂同狀者則爲兼卿申詞也爲擊後見の蒙聊記此旨而已

亞台藤 臣判

此本者連歌師宗祇右筆宗梅手跡西三條逍遙院奥書在の一軸借出令書寫了

一二條家爲和傳書 寫

一 卷

歌仙正統大祖當家一流と題する系圖は御堂關白道長公より爲世流は嫡家爲衡まで二男爲藤流は爲邦まで五男爲冬の流は爲右迄冷泉爲相の流は爲益爲將の十代に終る以上二條家の大略を載 次に懷紙の書様次會の事講師の事懷紙の書様讀師の事披講の事等を

記す

奥書

如今様與風能下以拜顔猶々御不審の義可申披講博士は去年注進候間只今注不進候

爲

和花押

一三光院御口義 寫

一 冊

歌道心得の書にして編中五畿七道といふは都の七口をいふと心得べき事にて五畿七道といへば日本國中の如く皆人もへり又爲兼卿達者にてはありしか共風體わるかりし也と其外俊成卿定家卿後京極殿等の事などを始め歌のよみ方をもよく記せり

一和歌淵底秘抄 寫

一 冊

嘉元三年十月三日定家卿四代忠幸入道慈寛より權律師源俊へ授けられし處の和歌の傳書にて二條流の奥秘といふべし

一永正日記 寫

一 冊

飛鳥井中納言兼雅卿 撰

和歌懷紙短冊の認様同會席次第口傳等注之

右の聞書者去る永正十七年の夏於防州山口御本所様御下向御滯留中に受御家の説注之了

又大永七池永清甫僧頼世の砌於旅宿隨分懇望而寫書之了

四 甫

殊の外御秘藏候つるを借用申候可努々秘々了

一實陰公言談 寫

一 冊

武者小路實陰公 撰

此書第一月日を明分に記されて和歌の心得を種々仰置れしを似雲法師以自筆半を記す書中後水尾院烏丸光榮公野朝臣中院通茂卿等の御物語を書留らる御會の事などわけてくわしく和歌者流の第一可見御物語なり

一芝山殿和歌物語

寫

一冊

芝山大藏卿重豊卿 撰

一名玉廉抄武者小路實蔭公烏丸光榮卿園基香卿冷泉廣豊卿靈元法皇等の近代歌人達の佳話を載せらる又古今傳授の事をくわしく書さる其外和歌の心得を擧ぐ中に左之一篇あり

定家卿の明月記は百卷にあまれる物也亂世にいか散けるや世に傳ふる處五十卷或は七十卷偶々卷數多きも札をわけて閉たるものにて證據に成がたし本書は冷泉家に傳はる然れ共冷泉家にも全部はなし近年公儀よりも其なき處を集め置せられて其家なればとて下されしとぞ世に定家の記録切とて掛物又は屏風に張るは明月記の本紙

の世に散りたる物也靈元院法皇の御文庫に世になき所八卷あり是を世に明月記補と號補といへばとて明月記の外なるには非ずされば其補のうちにて勘ふれば定家卿父のものにこもり小倉山莊にまします時母方の伯父善惠房といふ人其邊に庵室を構へられしが障子に色紙形を百枚張り定家卿の御出の時何にても歌書て給はれと所望により思ひ出し次第に家隆順徳院に至るまで百首書付て急なることにて撰ぶ共なく書よし見へたり建曆年中の事也明月記を勘ふるに此外に百人一首の事見へず云々

奥

書

右歌物語一卷延享戊辰夏桂先生秀樹の許にて口授之筆記畢不出於列序人數の外也云々

一懷紙案

寫

一冊

飛鳥井大納言雅庸卿 撰

懷紙の事 一首懷紙の事 二首懷紙の事 三首懷紙の事 五首懷紙の事 法樂の事 讀師の事 講師の事 發聲の事 懷紙閑事 短冊閑事 短冊硯の蓋にもりて題さぐる事 當座詠草認事 短冊認様事 短冊の事

奥書

寛文三癸卯年晩春中三洛陽在居之節後松軒仲安飛鳥井殿雅庸卿以自筆書之留置者也

寛延三庚午年冬寫之

具

一和歌書様

寫

一冊

尹

京極中納言定家卿 撰

中殿御會 院御所御會 内々常御會 后宮御會 社頭御會 以上和歌書様の事

和歌會次第の事 題讀様の事 讀人名の事

右作法の事書記せられし書にして奥書あり

此一卷中納言入道自筆也尤可令秘藏給候

前 大 納 言 花押

京極中納言入道自筆本相傳之間爲支證取宗匠之奥書訖

法 印 隆 淵 花押

是より一首歌二首歌三首歌之書様題之書様等を載られまた奥書あり

此一卷法性寺家爲保朝臣後胤也相傳之秘本也云々輒莫許外見而已

明應三年九月廿六日

權 大 納 言 宣 胤 花押

二千鳥のあこ

一 冊

中臣親滿 撰

松舍興清序藤原彦鷹大石千引後叙

兼題書體三條 詠草書體二條 懷紙書體二十七條 短冊書體十七條 附尾十一條

此編色紙短冊懷紙に歌かく事の法をつばらに古人之真蹟或は古書によりて考へ其外歌學必用の事を認めたり目次あり文政二年神無月十九日しるす

一歌

袋

六 冊

富士谷成壽 撰 卷首撰者之自叙あり

卷一 和歌五則 此内 歌學者和學者有識者歌讀在論

六運 五體 歌人名檢字 作者凡例也

卷二 詠格 選辭 詞題

卷三 時節春部 天象 地理 時令 人事 草木 花類 生類 雜

卷四 時節夏部 加服飾 器用 雜

卷五 時節秋部 除器用

卷六 時節冬部 除器用

以上戀 雜 旅 名所 諸癡 雜式等不載也

一津々之美草 寫

一冊

源良顯 撰 寶永庚寅年彌生之自序

此記舊事紀神代卷神武紀古語拾遺中臣祓等之妙なることの葉傳へうけし事共あるはみづから考へ出したる事などやまと歌百首につらねたるにて作者は山崎垂加の門生にや
卷末に

山崎垂加翁は藤森の神心を受得て明らかに此道をかゝげ出し給ふ末の世に又たくひ

なき事なり垂加^{シテマシキナ}靈社と祭り侍るやつがれ此傳への流れをうけて朝な夕な垂加の神の
恵みを仰き侍る

垂加の社にてらす神の道花咲藤の森につゝきて

一冊

一花 鳥 芳 囀 寫

土肥經平 撰

和歌の沙汰源氏の心得其外古學家の見るべき書也

一冊

一さき草

藤井高尙 撰 享和三年霜月橘千蔭本居大平兩序

歌のこと葉書の大むね ものにしるし置歌の詞書さきの人に送る歌の詞書詞書
書安からぬ事 昔のこと葉書はまことをしるしたる事 言すくなに書べき事 歌に
いへる事は詞書にはかゝざる事 詞書は歌にもらしたる事をかく事 あとさきに
ひてあやをなす詞 歌の詞をかく事 人のいひかけたる詞をかく事 題をかく事

繪に書るかたを題にてよみたる歌の詞書 月日をかき事 歌のおくにも詞をそふる事 花をさすといふ事 おなじてにをはのかさなれる事 字音の語によしあしある事 馬のはなむけによみたる歌の詞書 歌をもとにする事 詞書すまじき歌の事 此餘撰集及び古き集より抄出して正しき例をあげたり享和三年二月四日の書添あり

一 歌 語 一 冊

平 春海 撰

此書はいにしへより勅撰家集にいたるまで世々に歌の姿もこと葉もうつり替りて今の世の歌は古へにはいたくくだりたることをつくせし書なり

一 言葉のやちまた 二 冊

本居春庭 撰 文化三年五月植松有信本居大平両序

此書は所調五十連の聲のたてぬきを正し考へ詞の活用四段にわたり一段にかぎり中の二段下の二段たとらで八巻にわきまへたり引出たる詞はふるき文どもによる

一 歌 體 約 書 一 冊

田安中納言宗武卿 撰

賀茂真淵の後叙此篇は和歌八論の道を正しくすべき論書にして其道に志ある人は必讀の編たり

一 國 歌 八 論 斥 非 一 冊

大菅公圭瓊美 撰

本居宣長の註書八論はすべて和歌に關する處也即

歌源論 玩歌論 擇詞論 避詞論 正過論 官家論 古學論 準則論

一 國 歌 八 論 評 一 冊

伴 喬 溪 撰

一 國 歌 臆 說 一 冊

賀茂真淵 撰

一八 論餘言 寫

田安右衛門督宗武卿 撰

一 冊

一八 論餘言拾遺 寫

清水濱臣 撰

一 冊

以上の五書は何れも和歌八論の道を論究せり

一 濱 つ ごと

一 冊

加藤景範 撰

天象地儀神佛人事草木鳥獸虫魚衣服器物の類凡歌によむほどの物の詞を集めて部分にしたる也

一 古言梯標注

揖取魚彦 撰

一 冊

本居春海清水濱臣三大人の標注を加へ和歌の詞の便用になせり

一 泊 酒 筆 話

二 冊

清水濱臣 撰

此書は近世の歌人のうえにおきておもしろきはなしをあつめ又は近來の世にしられぬ歌人の小傳めきたることもおほく又まゝ歌よむ心得となる事多し

一 紫 文 製 錦

八 冊

橋本稻彦 撰 文化四年春本居大平序

此編は源氏物語の中より文かゝむことのたすけとなるべくおぼゆること共を集め出し中昔しの言葉つかひをよくわきまへて文かゝむ心得とする處也其類聚の部分は

春 初春 子日 鶯 霞 春雪 餘寒 梅 柳 春月 春夜 春曙 歸雁 花

山吹 藤 暮春 春雜

夏 首夏 新樹 若竹 郭公 夕顔 橘夏月 五月雨 螢 瞿麥 水鷄 鶉川

夕立 納涼 篝火 夏雜

秋 初秋 秋風 萩 朝顔 女郎花 薄露 秋前裁 秋野 秋夕 秋雨 雁
 虫 霧 月 菊 紅葉 野分 秋霜 秋夜 暮秋 九月盡 秋雜
 冬 初冬 時雨 落葉 霜 冬月 千鳥 霰 豊明節會 雪 網代 鷹狩 冬梅
 冬雜

戀之部 葛城輝敖の奥書を附す

雜 雲 雷 風雨 空 山 河 海邊 宮殿 居所 荒涼 人事 奉公 行粧

盛衰 交 言語 寢床

雜二 容貌 涙 人情 懷舊

雜三 賀 婚姻 産養 嬰兒 離別 猿 海路 行路 病 物怪 哀傷

雜四 釋教 夢 飲食 器財 衣服

雜五 神祇 公事 音樂 才藝 遊戲 饗應付歌會 學文 文筆 教誡 評論 俳諧

文化十年六月上梓

一紫文消息

一冊

橋本稻彦 撰 文化四年十月廿日自序

源氏物語の消息文をぬき出して傍註を加へ消息を書助とす其註に師云々しるすは本居翁の説なり

文化四年七月上木之

一伊勢物語披雲

寫

七冊

五十嵐篤好 撰

此物語は惟喬親王は文徳天皇御鍾愛の皇子にてよわしけるを位に即せ給わざるを初め二條後の事などもすべて執政家の斗らひ心よからず思ひ身を好色にはふらし惟喬親王出家して小野におわしけるをいたくかなしみける在五中將の忠誠なる心中をあはれみ誰人か作りし物にて言外に其情あふれたる事こゝかしこ照應ありて妙なる文章なる事を説き國史等より此物語中の人々の傳をぬき出年表を記し一目にみやすくなし臆斷古

意折釋の説ども情に叶はざる處を論ひたり初段より五段までは富士谷御杖の燈といふものゝ原稿あるによると云々

一古今假名遣

一冊

橋本稻彦 撰

萬葉集古事記日本紀等のかなづかひをくわしく訂正していろは分にし初心の爲に便となす

一正誤假名遣

一冊

賀茂季鷹 撰

此書は古事記日本紀萬葉集和名抄にもとづきて詞の假字をいろは分にして引出すに便ならしむ

一文 字 鎖

二冊

い勢の濱荻關の藤川のくわしき註を入れたり

一大伴ノ三津ノ考

一冊

萬葉集第一に同第七其餘に載る大伴ノ三津の濱邊は難波と江州とに大伴の三津あり一名二所と知るべしとあるを其以來の撰集家集を引て各所を考へ其確乎たる證を正しくせり一名二所のよみ歌は殊に其國分は知り難きにこそ

一言葉の千種

七冊

鈴木重胤 撰 弘化二年之春植松修理大夫雅恭卿序

此書は四季戀雜各題を分ちて證歌と詞とを擧げ其よみかたをおしゆ

一いはほの露

寫

一冊

鴨縣主祐爲 撰

明和七年十月十五日長明入道蓮胤法師五百五十年之追慕をいとなみてみれる舊蹟醍醐日野之外山に方丈石を尋ね法界寺に到り其邊之名所をも探り和歌を詠す

詠草の奥によくぞ山ぶみせられし歌人の情かくてこそと感吟候

入道大納言爲村卿

尋入る外山はとをき奥までも深きこゝろをしるへとはなる

御返し

ことの葉の道のしるへをおほらすはいかて昔のあとをたつねむ

明和七年冬十月十七日

於長明大夫靈前清書

鳴祐爲

一 玄旨法印和歌注書 寫

一冊

細川幽齋法印玄旨 撰

卷首玄旨法印秘注證歌目錄を題表す其詠歌作者は人丸家持兼輔公忠齋宮女御清正興風足則小大君能宣兼盛貫之伊勢赤人頼基重之順元輔元眞仲文忠見中務以上廿二人各首の註にして歌學秘讀之書なり奥書年號なくたゞ法印玄旨と記す

一 續冠辭考 寫

三冊

服部高保 撰

平高保は縣居翁門人にして其人となり詳に泊酒筆話に見ゆ此書自跋に云右は冠辭より下へのつゝけ師の舉殘せし部をあつめたれ共委く斷り書出すにもおよばし中にもと思ふをえりて清書すべきなり殘るはひとつにつかね書すべし又安永四年冬十二月考訖于時續冠辭百三十四條也下之一卷は別記にて五十四條之考へを付すすべての書ふり冠辭考に習ひあれば古學の大に益ある篇なり

一 和歌庭訓 寫

一冊

大納言爲世卿 撰

心はあたらしきをもとむべき事

詞はふるきをしたふべき事 餘情の事 題をよく心得よと申事 本歌の事

以上は爲世卿の意案にあらず祖先よりの傳説也

于時嘉曆元年六月十一日

染紫毫書

白

麻

畢

和歌雜部

六七六

一月詣和歌集

四冊

賀茂神主重保 撰

清水濱臣標註橘千蔭序平春海後叙

此集は壽永元年の撰にて時の歌人の勝れたるを撰べり平家いまだ盛世なりし程の事に
て其一族の歌多く入りたり千載集に讀人知らずと入たる忠度行盛兩朝臣の歌ども此集
には名をあらわせり

一月詣和歌集補

一冊

横山由清 校註 安政五年七月井上文雄序由清の跋に曰

右月詣和歌集補脱一卷はいにし年友人山川正份の藏本をかりて刊本に校合するついで
にかく別卷に寫し置つるを書屋のみてかの標註に附刻せまほしといふまに〳〵元

本の體裁にならひ撰集家集等に校合して頭に傍に註釋めくもの書しるし又清水光房
の藏本を得て對校するに季鷹縣主の本とあるは全くおなじさまながら永隆の校本と
いへるに少し異なる處あればそれもかたへにしるしそへてあたへつすべて全く増補
するもの百三十二首句を補ひ異同を註するもの十五首作者を補ふもの五首也又按ふ
に十月部の補歌ことに多きは十一月部の闕落まで混れ入たるものなるべし安政五と
せ二月はつか

一和漢兼作集

寫

殘欠 三冊

撰者知らず朗詠集の體にして作者の官位を以て順序を爲し其題詠の部立をなさず此集
殘闕にして中山中納言宣親卿の染筆なり同卿は長祿二年誕生長享二年九月十七日權中
納言に任じ永正三年九月出家す今を去る凡三百八十年斗也此比までは此書は傳りあり
しと覺ゆ其作者は

卷六 中納言家持より左衛門督基貞迄四十二人

六七七

卷七 參議篁より高定に至り二十三入

卷八 非參議式部大輔文時より散位諸範に至り廿七人六位遣唐學生安倍仲麿より宮

内丞橘正通に至り四人僧弘法大師より釋觀證に至り十七人也各詩歌共七八首

つゝ撰出せり

一中務内侍日記 寫

一 冊

中務内侍は冬嗣公の八世伯耆守範永九代從三位永經卿の女なり

此書は弘安五年八月月見の御宴より正應五年二月に到るまで行幸行啓節會御會等の時の詠る和歌及び其規式をもくわしく載る

このたひそ三輪にまいる音にきゝしよりはたうとく杉の木にわを三つけたるもあもしろし

年月は行衛もしらて過しかとけふ尋ねみるみわの山本

一俊成卿九十歳賀記 寫

一 冊

此記は和歌所に於て霜月廿三日に賀を給べきによりまづ屏風の歌とて四季三首づゝの

題を賜りて各奉られし十二首の和歌をのせ次に其目にまづ管絃の御遊ちわりて和歌

御製 百年のちかつく杖の世々の跡に越てもみゆる老の坂かな

釋 阿

百とせに近つく人そおほからん萬世ふへき君か御世には

其餘廿二首あり作者所謂此世秀逸揃ひ也後京極攝政左大臣太政大臣定家雅經知家長明

具親成家有家秀能頼房資實公經道資兼宗範光通光通具經道家長等也奥書に曰

貞治三年八月廿三日書寫了

羽林郎將藤爲重卿也

備前少將綱政朝臣年比心よせある中に予が満算をかぞへ賀歌をちくらる其志しをむ

くひんがため此一帖を思ひたち侍ぬもとよりちとくしき筆遣ひに痼病さへそいた

ればいとみぐるしけれど聊寸志をあらはさむとして其恥を忘れたるに南

元祿十三のとしやよひ十日あまりの程書終りぬ

亞槐老散木源判七十歳

一和歌一字抄 寫

二 冊

著者知らず上卷題百一下卷題九十五各多少其證歌を載す其首め東には春來從東

東路は名こそこの關も有物をいかてか春の越て來つらん

師賢

作例これに准ず其和歌は上五百八十一首下五百五十七首總計千百三十八首也奥書に曰

此一帖以飛鳥井大納言殿御本陶化林忠堯同俊被遊畢然卒度被拜見餘所望之條爲筆者

七人寫之訖外見憚多者也

于時大永元年八月廿三日今日如此
年號被替分

橘長賴

一名僧戀歌卅六歌仙 寫

一冊

撰者知らず

慈圓 遍照 素性 寂超 寂覺 增基 心覺 隆惠 俊惠 良暹 賢知 源緣

道令 勝觀 寬祐 源慶 實源 能因 寂然 隆緣 隆源 顯昭 西住 寂蓮

西行 祐盛 靜源 永成 戒仙 寬念 俊信 永源 淨藏 有因 宜源

以上一人不足す

一新古類句和歌集

寫

百二十冊

撰者知らず

此集は代々の撰集はいふまでもなく家々の集及び新撰和歌集のうちより上の句を以ていろは分けになしたるものにて古今類句の増補大成ともいふべき書なり

一太神宮御法樂千首 寫

一冊

元祿十四年九月廿一日御會

院 御 製 百 首 左大臣兼烈公 二十首

中務卿 宮 二十首 内大臣輔實公 二十首

左大將綱平 二十首 源大納言通茂 二十首

前大納言基量 二十首 前大納言淳房 卅五首

前大納言重保 卅五首 藏人頭隆長 十首

右中辨輝光 三十首 宰相中將基長 三十首

左中將公緒	二十首	右中將公澄	二十首
同 定基	三十首	中納言通躬	
前源大納言	六十首	清水谷大納言	六十首
今城前中納言	三十首	藤浪二位	二十首
外山三位	三十首	宮内卿	卅五首
左衛門督	四十首	白川三位	三十首
花園三位	二十首	風早三位	二十首
東久世三位	十五首	通清朝臣	廿五首
菅三位	十五首	兼康	十首
水無瀬氏孝	二十首	相尙	二十首
爲久	十五首	治部卿	四十首
德光	十首	雅季	十五首

講師 春	宰相中將	夏	隆長朝臣
秋	左衛門督	冬	兼康
戀	輝光朝臣	雜	治部卿
題者 春夏戀	左衛門督	秋冬雜	治部卿
奉行 今城前中納言	左衛門督	治部卿	

一御會歌林

寫

三冊

御會二十度の和歌を集む讀師講師發聲題名奉行迄雖記之略了

元祿七年二月廿五日 聖廟御法樂五十首和歌

元祿七年 四月廿七日 禁裏御内會十五首

元祿七年 五月廿四日 同 御月次三首

元祿七年 五月廿四日 同 御月次百首

元祿七年 六月廿四日 同 御月次三首

- 元祿八年正月十二日 仙洞和歌御會始六十首
- 元祿八年正月十七日 仙洞住吉御法樂五十首
- 元祿八年正月廿四日 禁裏御會始和歌六十七首
- 元祿八年二月十一日 仙洞住吉社御法樂五十首
- 元祿八年二月十三日 自仙洞被進關東、五十賀の和歌六十首題有松歡聲
- 元祿八年二月十四日 公宴御當座二十首
- 元祿八年二月廿二日 公宴水無瀬宮御法樂卅首
- 元祿八年二月廿五日 公宴聖廟御法樂五十首
- 元祿八年二月廿六日 仙洞御内會御當座二十首
- 元祿八年三月十六日 仙洞御當座十五首
- 元祿八年三月十六日 仙洞後座御當座十五首
- 元祿八年三月十六日 東園前大納言基賢入道七十賀屏風和歌十五首

元祿八年三月十八日

仙洞住吉社御法樂五十首

元祿八年四月十二日

仙洞住吉社句題五十首

一而十神宮奉納詠千首和歌 寫

一冊

園女詠奥に三十首和歌を附録す卷頭立朝春

明渡る今朝よりやまつ月花も心にうつる春の長閑さ

後序に云

言葉の國の姿にしていひ出せる處皆歌ならずや代々の人々一夜のほどにも千首よみ給ふあまたあらんかし予つたなき筆にむちうちそめて及ぬ數をとりみればつもれる事とても、夜の明がたちかき空にみち侍るを我師淞泉庵主にてむを乞すてに其しなさだまりければ伊勢の古郷神風や吹來るつてに御神のめぐみを仰つゝ奉納し侍るものならし

享保七丑年初冬

園

女

附録三十首も両大神宮へ奉納する處也其卷後の歌

神明依正直

守ります神の恵にすなほなることの葉の道代々につかへむ

一本空院宮五十回御忌追善和歌 寫 一冊

寛延元年七月廿五日興行三十二首題秋懷舊

かけきへし五十年の秋を忍ふ夜のなかひる月も雲かくれぬる 院 御 製

一靈元院十七回聖忌勸進和歌 寫 一冊

寛延元年八月六日興行四十八首題者右兵衛督奉行幸雅卷頭初春霞

春や思ふ山めくるしと詠しもしのふ霞のへたてゆく世を 院 御 製

一石山月見記 寫 一冊

稱名院公條公 撰

天文十四年八月十四日出京十五日江州石山寺月見の御記にして宗痕紹巴金后の三僧

御供たり名號首題十六首の和歌あり浩月江山の御詩金后次韻天龍寺江心和尙和韻を
附録す廿日世尊院廿一日岩坊等にて發句あり

秋風や月も浪たつこの海 金 后

一定家卿五百回忌追善詩歌 寫 一冊

冷泉中納言宗家卿 撰

元文五年八月廿日正當

和歌題 月前幽情

つくくとみぬよの夜を忍ぶそよおなし形見の月にひかひて 家 仁 親 王

詩 題 對 月 懷 舊

長仰餘芳四海傳 風流詞藻在遺編 花山院常雅

閑來往事唯明月 一夜照光臨几筵

五百年來傳美名 歌林雲齊一輪晴 林大學頭信充

清光更有盈虛數 明月記中千載情

一自撰歌寫

一冊

本居宣長集

此集は安永五年に始り天明三年に終る

卷首 關路 鶯

鶯の聲も霞をもる春はゆく人とまゐる相坂の關

一冊

一和歌唱和集

文化十二年正月清水濱臣序 文化九年六月早川廣海後叙

下河邊長流圓珠庵契沖の唱和集にして書中三十六人歌仙契沖の讚は荒木田久老の校

本世に流布するを以て除き富士百首は契沖の自筆本版刻あるに付長流百首のみを舉

ぐ總而九十一首也

三冊

一古今選

本居宣長撰 村田並樹本居大平同校

此書は鈴屋うし歌よみならふ人の爲に廿一代集の中より殊に勝れたる歌をまらびあつめて常にこれをよみうかべて姿詞の手本にせよと教へし書也

三冊

一古今贈答歌抄

清原雄風輯 藤原一虎小野幸雄同校

此抄は雄風初學の人贈答の返し歌よみならふべき爲にもとて萬葉集より八代集迄贈答の歌を書置たりしを更に又廿一代集の中よりえらびあつめ四季戀雜の類をわかちて校訂して贈答の模範にせむと板行せしなり

一冊

一近世三十六人撰

本居大平撰

豊臣勝俊 柳澤隆季 尾關正林 下河邊長流 契冲法師

荷田東麿 柳瀬方塾 田邊通直妻 賀茂真淵 民子

橘 枝直	荷田在滿	平 春郷	狛 諸成	藤原福雄
藤原美樹	多氣綾足	倭 文子	源 長昌	伊 くら米子
きよい子	大伴俊明	橘 千蔭	平 春海	揖取魚彦
小澤 芦庵	上田秋成	荒木田久老	伴 蒿溪	小津正啓
平 宣長	富士谷成章	須賀直見	藤原棟隆	田中道麿
平 千秋	以上一人一首を撰ぶ 文政八年正月十七日			

一近葉菅根集

清水濱臣 撰

十 卷

文化十二年初春巨勢日向守利秀序藤原忠興木村定良の長歌を卷首に載す且凡例あり
 此集下河邊長流僧湛水契冲阿闍梨より縣居門のかぎり宣長千蔭春海土滿久老魚彦を始
 め作者四十八人の長歌すべて家集ある人々の家集にもれたる迄も残らずあつめて類聚
 す通計三百四首也長歌よまむたよりには是に過たる書あるべからす

文化十二年春刻成

一養老和歌集

五十嵐篤好 撰

一 冊

此集は賀茂真淵富士谷御杖二人の歌也四季戀雜等部類をわかち八百首餘を擧たり長哥
 も入たり今世に近世の歌を類題したる集何くれと種々數多もあれ共初學の徒中くくに
 あらぬ道へさそわれ入りぬべきが多かれは篤好門人の爲に此二人のうしは古人にも立
 並ぶべき歌ども多かれはよき本なるべきを撰び題詠は歌の本意ならされば只部類をの
 み分ちたるものにて尋常の歌集にことなるもの也歌學ばむとする人はみるべき書也

天保二年春上梓

一詩 歌 合

一 冊

唐宋の詩歌を配付せり詩三十首林羅山撰の倭歌は中院通村公又三十首を撰べり

一河 藻 歌 集

二 冊

蓬庵村上忠順 輯

文久二年三月自撰の假名序

此集は詠史の和歌のみにて作者も極めて近き人のみ通計三百四十二人悉く巻後に其姓名録を附す

増補續群書一覽 卷第十一

西京 西村兼文編輯
文學士 入田整三校訂

紀行之部

一傍注須磨記 寫

一冊

壺井義知 抄

此記菅神ノ御作ト古ク云傳ヘタリシガ偽書ナリト云フ事既ニ桂秋齋本居宣長ノ説ヲ引テ群書一覽ニ載ス伴蒿溪國文世々ノ跡ニ其サマ古風ナリト云ト覺ユ今此傍註ハ昌泰二年二月菅家大納言ヨリ内大臣ヲ越任シテ右大臣ニ昇リマセシヨリアクル睦月廿日都ヲ出タ、セ須磨ノ浦ニ到ラセ給フ迄ノ記ニシテ詞葉ツカヒ古メカシク書ナセリカクヤ姫白太夫ノ事マガ載セラレタルガ偽書ノ事ハ云フ迄モナシサアレ近キ世ノ作ニシモアラ

ザラメ本文ノ傍ラニ朱字ヲ以テ悉ク注ヲ加ヘタリシヲ壺井義知翁校正シ北野ノ聖廟ヘ納メラレシ寫ナレバ此翁ハ此記ヲ信ジラレタリシニヤ其奥書ニ曰

再三校合加朱字傍注畢

壺井義知判

寛延二年巳三月五日寫之

北野社中

十川能範判

一土佐日記燈 寫

二十四冊

富士谷御杖 著

卷端大旨ニハ紀貫之朝臣一世ノ考案ヲ委シク附記シ次ニ校合ノ本書數部ノ傳來ヲ載セ其異同ハ各條下ニ是ヲ擧グ文化十三年三月廿一日ノ記ナリ脱稿ハ同十四年五月廿日ノ奥書ニ見ヘ此日記ノ附注ハ茲ニ於テ至レリ盡セリト云ベキノ篇タリ

一土佐日記考證 寫

二冊

岸本由豆流 著

此書ハ古キ註解コレアリ世ニ行ハルレト猶知レ難キ事モ多カルヲ北村季吟僧契冲真淵

翁本居宣長村田春海其外古人ノ説ヲ殘ラズ擧ゲ又自ラノ説ヲモ加ヘ古本十五種ヲ以テ校正ス此書ノ正本ト云ベシ

一古本土佐日記 寫

一冊

此書ハ蓮華院本ノ外ニシテ能キ古寫本ニ誰人カ注ヲ加ヘタリシヲ猶香川景樹ノ朱點ヲ施セリ卷端ニハ紀氏ヲ擧ゲ傍註頭書微細タリ奥書ニ云

右朱點者長門守平景樹或本ニ自所加點也予得見此正本而寫之者也云々 正典

一丙辰紀行

一冊

林羅山 撰

此編ハ元和二年道春三十歳ノ時江戸ヨリ京師ヘ歸ラル、ノ紀行也倭字序ヨリ名境ノ景狀ヲ記シ神社佛刹ノ由來ヲモ著セリ

一東關之記 寫

一冊

澤庵禪師 著

寛永十三丙子年十一月七日江府ヲ發途シ大徳寺開祖三百年忌ニ當リ上京セラル、ノ紀行也

世上光陰下坂車 歲云暮矣欲歸家

士峯白雪看無飽 又思長安一日花

此記詩歌ヲマジエタリ卷後ニ報牡丹詞矢野氏ニ答ル辭弟ノ方ニ遣ス文以上三篇ノ文ヲ載ス

一 癸未紀行

一冊

此記ハ寛永二十年後光明天皇御即位ノ儀ニヨリ林翁羅山向陽子父子江府ヨリ京師へ上ラル、時ノ紀行ナリ羅山六十一向陽二十五ノ作ト云ヘリ

一 遠遊紀行

一冊

山崎闇齋 著

明曆四年ノ春闇齋敬義京都江戸往復紀行ノ詩本也

一 再遊紀行

一冊

山崎闇齋 著

萬治二年闇齋五十二歳ノ時東武再遊ノ詩ヲ集メタリ洛陽ヲ發足シ江府ニ到ル迄ノ景狀ヲ五言六百二十句三百十韻ノ詩一篇ニ述ベタリ歸洛ノ詩ハ多ハ絶句ナリ

一 手こご花

一冊

月坡禪師 著

元祿二年秋常州那珂天徳寺ヨリ江州志賀へ湖南月坡和尚ノ歸ルノ紀行ニテ日次ニ其詩歌ヲ録ス編中光園卿ヲ始メ其家臣ニ餞別詩歌數首アリシ中ニ

安藤爲範

四見青黃不記年 深居空學大梅賢

送吾若問出山路 笑曰人間流落禪

志賀の里に歸りて

月坡

みし人は跡もなきさの哀れ世に返るも悲し志賀の浦浪

卷後ニ山科大宅禪寺二十八境四十二景ノ詩ヲ附シ撰者假名ノ序跋アリ

一常 陸 帶 寫

一 冊

安藤内匠頭定爲入道朴翁 著

朴翁ハ年山爲明ノ父ニシテ丹波國桑田郡千歳山ノ麓ニ在住シ水尾村ヲ過キ清瀧川ヲ渡
リ嵯峨ヲ經テ都ニ入ル所々名所ノ和歌ヲ記シ元祿十一年三月十二日出京水戸へ行ノ日
記ニテ光圀卿へ面謁シ筑波ヨリ日光山へ廻リ歸京スル迄ノ紀行ニテ卷末ニ餞別ノ詩歌
ヲ多ク水戸藩ニ送レルヲ載ス

歸るへき道もおほへす旅衣名残を思ふ花の木の本

一勢州 紀行 寫

一 冊

北村季吟 著

元祿二年九月十日十三日伊勢内外ノ宮御遷宮ニヨリマウツルノ記ナリ和歌五十九首詩

六首

曉天命駕道横縦 親戚送行情已濃

唯是樂遊非旅客 老妻新婦共相從

都出てまつ打わたす鴨川の千鳥もあのか友さそふらん

一御堂關白高野詣記 寫

一 卷

伊豫守範國朝臣 草

永承三年十月十一日御出車淀川ヨリ川舟十六艘ニテ下リ從橋本上陸八幡宮御參詣今夜
御舟熊川邊ニ止ム十二日住吉ノ濱へ着御社參和泉國會根ニ御宿十三日紀伊高野政所御
泊十四日高野山中院奥院へ御參拜十五日奥院廟堂奉供御明十萬燈夫日長者賜祿長者又
大師手書一卷ヲ獻ズ此日下山子之剋政所へ着御十七日河邊ヨリ御乘船妹山嶺山ノ紅葉
葉御覽粉河ヨリ十餘町ニテ止同寺へ獻御明五千燈御泊十八日日根御泊十九日天王寺へ
御入五千燈入夜熊川御宿廿日鳥飼御牧ヨリ御乘船入夜御歸館紀行也

一 熊野道中記 寫

一 冊

七〇〇

此記著者詳ナラズ卷端ニ享保七年壬寅十月指上候熊野道中記之草稿也ト云々紀州侯熊野へ御參詣ニヨリ撰スルノ書ナルヨシ卷後ニ見ヘタリ依テ和歌山ヨリ里程並ニ鄉村或ハ名所舊跡ヲ記シ頭書ニ別考ヲ附シ本宮新宮那智三山ノ圖アリ熊野御幸定家記所載之王子ノ數名ヲ附録ス但シ是ハ鳥羽ヨリノ御幸ニシテ攝州阿部野王子ヨリ記シタリ

一 庚子道之記

一 冊

白拍子武女 著

橘千蔭之序平春海後叙清水濱臣之標注

此道之記ハ享保ノ比白拍子武女ト云ルカ尾張ヨリ江戸へ歸レル折ノ日記ナリ奇文メデタキ事ノ和漢ノ學ニスグレタル才誠ニ古今タグヒ少ナキ筆ノスサミナレト云

一 歷國行程記

寫

二 冊

員原篤信 撰

吾孀路之記 江戸ヨリ尾州熱田迄ノ事ヲ略記ス

美濃路之記 熱田ヨリ京迄ノ事ヲ記ス

播州之道記 播州高砂ヨリ室迄ノ里程ヲ記ス

東山道之記 江戸ヨリ美濃迄

江上乾卷

日光行程記 江戸ヨリ日光へ行道之記

日光山之記

上州倉賀野道之記 自日光至上州倉賀野路ヲ記ス

足利記事 野州足利學校ノ記事也

關ヶ原ヨリ敦賀之道之記 自敦賀京へノ道之記

安藝國嚴島之紀事

以上坤卷

吾妻路之記ノ跋ニ云

過にし年の春君命を請て東武に行端午の日郷里へ歸りぬ同じ年の冬又命をかゝりて

再ゆき今年の三月春と共にかへりて侍る時東山道遊歴の暇給はせける再び往來の間過行處之道路の里程名區故迹又は佳境勝景或は神社佛寺のいみじき所々あるはふるき戰場城壘など其里の人に尋ねてしるし集めしかばやうやく一冊子となりぬ是我後之記覽に備へたのみかはいまだ其處を見ぬ人はすてに聞わたるも猶なくさむならひなれば我人のため筆にまかせ俗語を以て唯事實をのみあらわし侍る天下の名區佳境を見盡さん猶好みしは古人の三の願ひの一つ也されば此樂しみ富貴功名を得るよりは尤得難しいかなれば山川よき處は造化おしみて世人の容易に見る事を許さずといえり然るに我いかなる幸ありてか此得難き清福を得るや誠に天恩と君恩はひとしく忘れがたき事にこそ覺え侍るなれ此書に記せる事は唯一とほり過行し時かりそめに里人馬卒の輩にとひて聞あつめし事共なれば猶疎謬なる事多かりなん地理を知らん人の刪補待而已

貞享二年八月 日

筑前 貝原 篤 信

一 石川 紀行

一 冊

三浦義徳 撰

享和二年ノ比河内國ニ傳ヘシ古キ世ノ物ハ南ノ郡ニ多シトテ同地ニ到リ川上ノ岩船山石川ノ神下山釋尊寺交野の御野高福寺法貴寺牧岡ノ神社往生院高安玉祖ノ神社恩智村大御食津ノ神社雁林堂通法寺大黒寺其外古跡ヲ委シクシ古物ヲ舉ゲ鐘銘碑石等ノ年歴ヲモ記シ諸書ノ誤ヲヨク正シタリ

一 游 東 阪 錄

二 冊

松崎謙堂 撰

此編ハ文政元年五月奥州松島游覽之紀行也

一 富 士 一 覽 記

一 冊

梅月堂宣阿 撰

宣阿ハ周防藩士香川正矩之次子諱景繼號堯真夙來京師自成一家元祿八年四月十一日富士遊覽ノ爲メ嚴阿法師井上隨入ヲイザナヒ都ヲ出同廿三日遠州白須賀鹽見坂ヨリ富嶽

ヲ望ミ

氷雪成堆千萬丈 當頭深洞住仙妃

負天肩背雲烟外 疑是白鵬息未飛

山々はまた明ぬよの雲の上に白さをみれば雪の不二の根

兼テハ此山ノ麓迄ト思ヒ設ケシニ伴ヒシ中ニサハル事出来テ是ヨリ歸ラレシ道々ノ紀

行也

奥書

茲甲午九月值百回忌辰玄孫長門介景樹梓行之

卷首天保五年七月八日從四位下隱岐守豊原文秋之序又奥書ニ云

今年高祖父の君百回忌に當らせ玉へる追福の爲其かみしるし置せたる富士一覽記

を梓につけて世に弘くせむとす其卷をしもさしけ備ふるとて書々へて奉る二首

雲井まで聞へあけるかふしの根の雪の調は千世も轟け

言の葉の花に遊ふらん百年のこてふの夢は覺すともなし

長門介平景樹

二冊

一東韃地方紀行 寫

間宮林藏口述 村上貞助編纂

卷端文化七庚子年秋七月秦貞廉ノ凡例アリ此編ハ本蝦夷地ソーシャヲ發シテ東韃德楞

ニ至ルノ紀行ニシテ間々圖繪ヲ加フ

一杉田日記

一冊

清水濱臣 著

此日記ハ濱臣獨歩ニテ蒲田杉田ノ梅見ニ旅立シ折ノ紀行也歌ハ杉田ニテ讀シ長歌一篇

ノミニシテ文辭ナガラカニヲモムキアリ

一攀晃山記

一冊

林大學頭 眺 著

此記ハ天保十年四月十四日家ヲ發シ同廿五日歸家野州日光山ノ紀行也卷後ニ晃山吟草

廿五首ヲ附録ス佐藤坦ノ序アリ

一日光山御紀行 寫

水戸中納言齊昭卿 撰

天保十年四月十日將軍家日光山御社參ニヨリ同ク詣給フ御紀行ニテ詩歌取交リテ四十
四首載セラル此集松齡ト云ル人ノ輯ムル處ニテ其姓名詳カナラズ奥書ニ景山公ノ唐和
ノ二歌ヲ寫シ奉リテ

玉くしけ其ふた歌のなみならずたふとき君の形見とそ思ふ

一御巡見記 寫

五冊

此書ハ舊幕府ノ大番頭京大坂詰番トシテ登上ノ節道中筋ヲ巡見シ又京坂在城中巡見ス
ル處ノ記ニシテ社寺ノ因縁並什物領地高地坪等迄明記ス其順ハ

- 一 東海道 木曾路 大阪 長柄筋 八尾筋 堺 住吉筋 鳴野筋 天王寺筋
- 二 二條城 下寺町筋 東福寺筋 上寺町筋

一冊

- 三 叡山筋 鞍馬筋 吉田筋 愛宕筋 高雄筋
- 四 石山筋 大原筋 宇治筋 下 嵯峨筋 北野筋 坂本筋 醍醐筋 伏見筋 八幡山
崎筋

五 大坂御城中御道具記 二條御城中御道具記

一所司代巡見帳 寫

二冊

此編京都所司代巡見ノ箇所其由緒ハ大概ヲ擧ゲ什寶ハ微細ニ記シ且堂社ノ間數ハ殊ニ
詳ナリ

- 宇治筋 下嵯峨筋 西山筋 大原筋 岩谷筋 東福寺筋 醍醐筋 石山筋 山崎筋
 - 八幡筋 伏水筋 叡山筋 坂本筋 山科 下寺町筋 以上
- 附録文政十年七月加入妙顯寺本法寺立本寺瑞泉寺本因寺興正寺妙滿寺相國寺本能寺誓
願寺歡喜光寺圓福寺本覺寺廣隆寺大雲院新善光寺佛光寺以上十七箇寺ノ什物ヲ錄シ巡
見ノ砌リ差出スノ便ト爲ス流布名所圖繪トハ大ニ趣ヲ異ニセリ

一常北遊記

一冊 七〇八

延壽青山季卿 著

安政丙辰仲春棕園森蔚敬並津田信存二跋

此記安政二年卯九月廿日水戸表發途同十月五日歸邸常陸國北方ヲ漫遊スル處ノ記ニシテ附録ニ詩十首文二篇ヲ載セタリ

一秋錦雜記 寫

一冊

北原 某氏 著

慶應三年丙寅長月廿七日父光吉都ノ任果テ東海道ヨリ奥州會津へ歸國ノ紀行也同神無月廿一日家ニ歸リ同廿五日ニ終ル和歌四十七首ヲ載ス

新居の渡り雨はいみしふ降りいてたる

ふみやその笠取いてよ浪風のあら井の渡り時雨ふりきぬ

富士をよめる中に

筆にたに及はぬものをふしか根のこゝろたかくはなとおもひけん

一陸奥の名所栞

久永連藏 著

嘉永三年十月五日仙臺侯其封内奥筋ヲ順視セラレシ日次ノ紀行ニシテ 第一松島野蒜 第二北上川遊巡湊村吉野先帝碑 第三多福院及大原ノ宿 第四金花山辨天黄金山ノ舊蹟 第五雄勝ノ濱以下九章ニ到リ勝景名所ノ事ヲ記シマ、和歌ヲ詠出ス

一己末紀行

一冊

本居大平 著

此書ハ寛政十一年正月廿一日ヨリ二月廿八日ニ終ル師翁ノ供ニテ伊勢ヨリ紀ノ路ニ至ル紀行詠歌ヲ載ス堀尾三子ノ後叙歌數三十六首アリ

廿一日阿坂山の西之道をゆくほと

春風にけさは雪けの雲はれて峯もあさかの山そまぢかき

畫卷之部

一春日明神驗記

二十卷 宮内省御物

書 右近將監高階隆兼

好古小錄云隆兼畫力精好微細ト雖苟モセス古今ノ繪詞傳數種アリト雖考古ノ益アル此
驗記ニ並ブ物ヲラン哉云々此畫卷ハ詞書ノ鷹司基忠公ヨリ春日禰庫ニ納メラレ後故有
テ天保ノ比其子孫政熙公取戻シ置レシヲ近年御物トナル其比ハ十六卷ニテ四卷闕ケタ
ルヲ他ヨリ出テ今ハ全部トナル詞筆者ハ

卷 一 詞 鷹司關白基忠公

承平託宣 竹林院殿ノ事 金峯山御幸ノ事

卷 二 詞 同

寛治御幸 永久衆徒鬪亂 二條關白

卷 三 詞 鷹司關白基忠公

堀河左府 鹿嶋和歌 信經

卷 四 詞 鷹司關白基忠公

天狗入東三條殿 永久春日詣神託 普賢寺攝政 後徳大寺左府

卷 五 詞 鷹司關白基忠公

俊成卿事 季能卿事

卷 六 詞 鷹司攝政冬平公

狛行光事 親宗卿事 蛇吞心經事

卷 七 詞 鷹司攝政冬平公

經通卿事 開運夢房事 近眞陵王事 隆季卿家女房夢事

卷 八 詞 鷹司攝政冬平公

清凉寺本尊 依唯識論功能遁病難事 増利僧都事 愛和僧都事 清藏僧都事

離寺僧蒙神託事

卷 九 詞 鷹司攝政冬平公

祈親持經事

卷 十 詞 鷹司攝政冬平公

林懷僧都事 永超僧都事 教圓座主事 教懷上人事

卷 十一 詞 鷹司攝政冬平公

惠曉法印事 永萬夢想事

卷 十二 詞 鷹司攝政冬平公

藏俊贈僧正事 惠珍夢事 思覽事

卷 十三 詞 鷹司攝政冬平公

晴雅律師事 勝詮僧都事 增慶事

卷 十四 詞 權大納言冬基卿

唯識論遁火難事 隆覺僧正事 覺房事 唯識論安置屋遁火災事

卷 十五 詞 權大納言冬基卿

唐院得業事 教英得業事 大乘院僧正事 紀伊守之事 清增之事

卷 十六 詞 權大納言冬基卿

解脫上人事 隣白之事

卷 十七 詞 一條院僧正良信

明惠上人事

卷 十八 詞 一條院僧正良信

明惠上人事

卷 十九 詞 權大納言冬基卿

正安神鏡事

卷 二十 詞 權大納言冬基卿

一 繪師草紙

書 左京權大夫藤原信實

此書卷ノ古寫ヲ丹鸞叢書中ニ收メアリテ筆力精勁奇絶ハ人ノ知ル處以テ信實ノ眞筆ト皆思ヘリ然ルニ此ノ御物ハ明治二十年ノ比德川家ニ於テ騎射

叡覽被遊シ砌リ同家ヨリ獻納スル品ニシテ丹鸞叢書ヨリ餘程大形ナルノミナラス書又遙カニ勝レタリ

二 卷 宮内省御物

一 志貴山緣起

書 鳥羽僧正覺融

此ノ繪卷ノ奇緣妙態タル他ニ比類無ク飛倉ノ不思議ハ寺納ノ空米ヲ告クル諷諫ニ出テ駄天輪寶ニ乗シタルノ畫力ハ凡手ノ企テ及ブベカラザル處其意匠實ニ非常タリ

覺融範俊共ニ鳥羽僧正ト號ス此畫者ノ考アレト略ス

三 卷 和州 志貴山藏

一 人物禽獸戲畫

書 鳥羽僧正覺融

好古小錄ニ云禽獸艸木ヲ寫ス戲畫ニアラズ此ノ畫ハ禽獸ノ戲態ヲ著シタル迄ニテ戲畫ニアラズト云歟意趣不凡畫力卓絶斯ノ如キハ他筆ノ及ブベキニ非ス此奥書アリ

四 卷 榊尾 高山寺藏

我藏繪本也建長五年五月 日

竹 丸 花押

此ノ竹丸ヲ高山寺ニ於テ住職ニ尋ネ古書ヲ搜索セシモ所見ナシ四卷ノ内弘化年間江戸へ出開帳ヲナセシニ事故アリテ此ノ内二枚ヲ人ニ授與セシト聞シガ其後蟠川式胤ノ所藏ニ歸シタルヲ閱覽ス今ハ商人ノ手ニアリ

一 華嚴祖師繪傳

書 左京權大夫藤原信實

五 卷 榊尾 高山寺藏

詞作者 高辨明惠上人筆者ハ

法ヲ敬重シ

開田御室法助准后

夜ステニ明テ

同

新羅國ノ大王

光明峯寺攝政道家公

義湘ノ船既ニ唐ニ入

岡屋關白兼經公

己ニ新羅ニ至リテ

北山太政大臣公經公

此書卷ハ一部八卷タリシガ元龜年間土一揆ノ亂妨ニ羅リ什寶類多ク盜マレシガ中仁和寺ノ邊ニ捨置タリシヲ取集メシガ遂ニ三卷ハ其所在ヲ失セシ旨方便知院菊淵上人ノ手記ニアルヲ見ル且添書ニ曰

元和二年七月改定

菊淵上人
俊怡上人

一平治物語畫

五卷

繪 住吉法橋慶恩

詞 從二位家隆卿

觀古美術會聚英ニ云紙本着色但シ闕本也院中燒討ノ條畫工落款ナシ評ニ曰筆力精勁著色巧緻意匠モ亦高妙其軍兵ノ情態ヲ盡スニ至テハ畫家ノ闕ク可カラザルモノナリ兼文云當時此五卷ハ左ノ家々ニ所藏セリ

舊雲州侯

松平氏藏

信西獄門ノ卷

福島某藏

三條殿夜討ノ卷

本多忠鵬氏藏

待賢門合戰ノ卷

松山侯
久松定謨氏藏

常盤ノ卷

舉母侯
内藤氏藏

一後三年合戰繪

三卷

繪 飛彈守惟久

備前侯
池田家藏

詞上文殿寄人仲直 詞中持明院左少將保修 詞下世尊寺從三位行忠

按ニ東鑑ニ飛彈守惟久ノ書卷物ノ事ヲ記ス世尊寺行忠ハ延徳元年七十歳ニテ卒ス持明院保修ハ中納言保有ノ子ナリ時代イタク相違ス惟久ノ書ニ後年詞書ヲ三人ノ書添タルモノニヤ

一過去現在因果經

書並書共 弘法大師

一 卷 山城千本 蓮臺寺藏

古川躬行氏ノ好古書譜ハヨク網羅シ盡シタル中ニ此一巻ヲ漏シタルハ不審アリ全部ノ四部ハ上ノ方着色ノ圖様古態妙絶ニシテ奇畫タリ下ノ方六部ハ香紙ノ經文漆ノ如ク筆畫俗ニ云隅寺心經ト稱スル大師ノ筆ニ同シク一目千載ノ書畫ト知ラル此ノ零卷六十二行一巻ハ冷泉爲恭ノ舊藏ヲ水藥玉苗ニ傳ヘ今ハ久邇宮殿下ノ寶庫ニ收リ又二十二行一紙一巻ヲ神田香巖氏ニ藏ス此外ニアルヲ知ラズ

一過去現在因果經

書 任吉法橋慶恩 經 筆者不詳

一 卷 東京 青木氏藏

跋建長六年甲寅二月廿七日執筆了快畫師住吉住人法橋慶恩子聖衆丸

一相撲ノ圖

書 春日内匠頭基光

一 卷

跋右件之圖者是繪所預土佐之祖從五位下内匠頭基光並息阿闍梨公及巨勢公持之所圖也

元祿九年丙子秋九月之吉

從五位下刑部大輔 藤原光成 花押

一能惠法師畫詞

繪 土佐行長 詞 寂蓮法師

一 卷 太秦 廣隆寺藏

紙本淡彩古色愛スベキ畫詞ハ殊ニ能書ノ名高キ寂蓮ノ筆ナレド考證ノ益ハ少ナキ圖ナ

一北野緣起

書 左京權大夫藤原信實 詞 後京極攝政良經公

八 卷 京都 北野神社藏

此畫卷ハ根本緣起ト稱ス希世ノ寶物美術上最貴ノ重物タレト全備ニアラズ闕卷ナリ畫

カノ變化極リナク遒勁意匠奇妙ナラザルハナシ卷第一ノ後叙ニ曰

北野聖廟緣起不慮紛失其所在空送歲月已久于茲目代照世索求于四方得古編緣起八卷於泉南大寺之大藏中雖然欲償之不容易故謁縣令石田木作尹請遂寫望縣令威照世志深切而文祿五稔秋遂以得令終素願不勝抑躍抱以奉備寶前也可謂合浦珠去復還矣嗚呼是亦非神慮威德之盛乎于時慶長第四曆己亥夷則七日北野寺務無品親王記之

第二卷以下之跋

慶長第四己亥年七夕

覺圓親王書之

兼文云此ノ書卷ノ紛失モ元龜ノ三好亂ニ土一揆ノ狼籍ニ懸ル高山寺ノ華嚴祖師繪傳ノ盜難ト同時ニシテ共ニ關卷トナル四國兵ノ亂妨實ニ惜ムベシ又石田木作尹ハ治部少輔三成ノ兄木工頭重我トナリ此頃堺奉行ヲ勤メ祿壹萬石ヲ領セシガ慶長五年關ヶ原ノ亂ニ江州佐和山城ニ於テ父隱岐守爲成以下ト屠腹ス

一請雨經法差圖

一卷

書 閑觀房玄證

神泉苑ノ圖ヲ首卷ニ載ス祈雨法執行規式ノ圖ニシテ池ハ南面ナリ東ノ方阿闍梨房三間修理職ノ所課西ノ方供所二間ハ木工寮ノ所謂中央ノ檀所五間三面木工寮ノ所課其外池ノ屋神供所檀所番所宿所及二十八流幡ノ圖檀場莊嚴ノ圖大檀所ノ圖大曼陀羅ノ圖敷曼陀羅ノ圖護摩壇ノ圖十二天壇ノ圖聖天壇ノ圖水天壇ノ圖等ヲ掲グ
跋右住永久指圖註之彼時繪圖等頗髣髴也今任彼記並先師口傳具之圖之外見尤有憚不可
出行相耳于時壽永二年六月六日註之重猶可勘定也

沙門勝賢

一釋奠ノ圖 一卷

書者不詳

廟門着座之圖庭座之圖拜廟之圖都堂之圖應堂饗宴座之圖等ニシテ中世迄大學寮ニ於テ例年執行アリシ式圖ニテ位階ニ應シ衣服ノ制ヲヨク糺シタル圖タリ

東京

青木氏藏

一北野緣起 一卷

繪 權大納言爲家卿 詞書共

此卷紙本墨書殘闕タリト雖モ書法秀絶清涼殿落雷ノ段其筆勢殊ニ卓妙タリ此卿ハ書ニハ隨身庭騎ト歌仙繪ハマ、世間ニ見ル處ナレド此緣起ノ如キハ其斷簡ヲモ傳フルナク墨繪中ノ逸品佳賞スベキ書卷タリ

一法然上人行狀繪傳 四十八卷

洛東 知恩院藏

書 豐前守邦隆 越前守長隆 刑部大輔吉光 越前守光顯 越前守長章 飛彈守惟久 兼文云名畫拾彙及寺傳ニ曰書吉光 好古小錄ニ書光信考古畫譜ニ未定 展閱目錄又土佐吉光ト記ス然シテ其一人ニ非ズ數人ノ手ニナルト載ス倭錦ニハ六名ト記ス今コレニ從フ詞筆者ハ左ノ如シ

- 一 二 後伏見天皇宸翰 四五 世尊寺從三位行尹
- 三 後伏見天皇宸翰 六 世尊寺從三位行尹
- 七 後伏見天皇宸翰 自九 青蓮院一品尊圓親王
- 八 後伏見天皇宸翰 至十三
- 十四 後二條天皇宸翰 十五 後二條天皇宸翰 一品尊圓親王

十六 姉小路從二位濟氏 十八 一品尊圓親王

十九 世尊寺從四位定成 廿 世尊寺從四位定成 姉小路從二位濟氏

廿一 同 姉小路從二位濟氏 廿二 後二條天皇宸翰 世尊寺從三位行尹

廿三 世尊寺從三位行尹 廿四 姉小路從二位濟氏 後二條天皇宸翰

廿五 後二條天皇宸翰 廿七 姉小路從二位濟氏

廿六 一品尊圓親王 卅一 三條太政大臣實重

廿九 一品尊圓親王 卅二 後二條天皇宸翰

卅 姉小路從二位濟氏 自卅三 後二條天皇宸翰

四十 伏見天皇宸翰 四十一 姉小路從二位濟氏

四十二 後二條天皇宸翰 自四十三 後二條天皇宸翰

外題尊圓親王卷背每縫足利尊氏題花押

右目錄一卷寶永五戊子初春中浣 東大寺別當兼華嚴宗長史安井門主前大僧正道恕書

一件大納言繪詞 三卷

書 刑部大輔光長 詞 參議雅經卿

舊若州侯

酒井忠道藏

七二四

紙本着色筆勢巧力俱ニ到リ意匠超絶殊ニ逸品也此書ハ件大納言善男應天門ヲ燒キ其罪ヲ大納言源ノ信ニ嫁スルノ謀議ヲ顯セリ卷中應天門燒失ノ模様火中ニ飾ノ棟瓦ノ圖アリ今世現物ノ遺存スルハ和州唐招提寺ニ見ル而已

一西行物語 二卷

書 土佐守經隆 詞 權大納言爲家

尾州家藏
蜂須賀家藏

書書共高尚ノ逸品ニシテ比類少ナシ惜ムベシ全部ニハ二卷不足ノ闕本タリ

一源氏物語繪 三卷

書 主殿頭隆能 詞 世尊寺從三位伊房

此詞書一説ニ後京極攝政良經公ノ筆ト云蓋シ世尊寺ニ近カルベシ書力秀佳古色愛スベシ其所藏家ハ

早蕨 ヤトリ木 東屋 一卷

舊尾州侯

徳川氏藏

柏木 横笛 同

同

夕霧 鈴虫 御法 同

東京

柏木探古藏

一十二同縁圖 一卷

西京

山田永年藏

書 實勝 跋欠年十一月廿三日書寫了 實勝

紙本墨畫筆力適勁ノ奇品タリ舊梅尾高山寺ノ什物ナリシガ中比世ニ出タリ此實勝ハ定家卿ノ比ノ人ニテ明月記ニ其書ノ事ヲ載セタリ

一二摩耶戒場圖 一卷

書 惠日坊成忍

此圖ハ山城國葛野郡梅ヶ畑村梅尾山高山寺十無盡院寐殿南向ノ圖ニシテ舊六條殿ノ御所ヲ建保二年二月勝福院關白殿下ヨリ被移所ヲ三摩耶戒場ニ取用ユル圖ナリ誦經机アリ異風ニテ今世見ザル式ナリ

七二五

一將軍塚建築之圖

一卷

高山寺藏

寺傳ニ延曆遷都ノ時寫ス處ナリト云東京帝室博物館ニ於テハ惠日坊成忍ノ筆法ナリト云一説ニ藤原信實ノ模寫スル處ナリト何レ歟是ナルヤ千載ハ信シ難キト雖モ圖様ハ延曆ノ風姿ナリ筆力卓絶鳥羽僧正覺融ノ畫ニ近シ紙本墨畫中ノ佳品タリ

一鑑眞和尚東征傳繪

六卷

和州唐招提寺藏

畫 六郎兵衛入道蓮行

詞 足利伊豫守後室 島田民部大輔行兼 大炊助入道見性 美作前司宣方

表紙裏ニ曰

奉施入唐招提寺永仁六年戊戌八月 日 極樂律寺住持沙門忍性

此卷畫妙ナラズ圖スル處異邦ノ事ノミニシテ採ル處ナシ船ノ製ニ少シ異アルノミ且ツ此中一卷繪ナク詞計リナルアリ

一北野緣起

四卷

西京北野神社藏

繪 越前守行光 畫力秀逸ナレト惜ヒカナ殘闕タリ

寺町四條

一 遍上人繪詞傳

二十卷

金蓮寺藏

畫 越前守行光

詞 後伏見天皇 三條太政大臣實量公 後二條天皇 冷泉大納言爲秀卿 花園天皇

轉法輪內大臣公忠公

畫ハ秀逸ニシテ書ハ非常ノ貴重タリ

六條道場

一一 遍聖行狀繪傳

十二卷

歡喜光寺藏

繪 法眼圓伊 詞 聖戒法師

紙本着色筆力自在精緻ニシテ事物ノ考證ニ益多シ

跋正安元年己亥八月廿三日西方上人聖戒記之了 畫圖法眼圓伊外題從三位經尹卿筆

應安二年乙酉卯月三日破損之間修補了干時僧阿延德四年六月廿三日及大破之修理

之干時滿願寺住持覺阿

一遍聖行狀繪傳 十卷

相州藤澤

清淨光寺藏

七二八

書 刑部大輔吉光 詞 一ヨリ兼空上人 五別手 七八又別手 九十 此筆者別手二人ノ姓名ヲ闕ク

一泣不動繪緣起 一卷

寺町

清淨華院藏

書 託摩勝賀法橋

當寺ノ什寶ニ智證大師ノ筆泣不動ノ一幅アリ無類ノ俊秀絶畫タリ是ガ繪緣起ニシテ非凡ノ筆勢畫様ノ奇態ナル不動ノ縛セラレテ童子ノ劔ヲ荷ヒ地獄ニ至ルノ妙言語ニ述ベ難シ其火災ノ彩色又自然一家ノ風アリ

一長谷寺繪緣起 三卷

和州

長谷寺藏

繪詞共後圓融天皇宸翰ト稱スレド同寺之古記ヲ取調ブレバ同帝ノ御寄附ニシテ宸翰ニ非ズ純粹古土佐ノ畫風ニテ書ハ世尊寺ノ末流タリ

洛西妙心寺内

春浦院藏

一福富草紙 一卷

書 伊豫守隆成 詞 後崇光天皇宸翰

此畫卷今一本東京益田孝氏ノ珍藏アリ畫圖極メテ異同別手ノ品タリ故青木信寅氏ト此ノ畫ヲ一覽セン砌リ同氏ハ益田氏ノ藏遙カニ優レリト恐ラクハ隆成ノ筆ハ春浦庵ノ品ニ非ズト云フ信ニ近カルベシ

醍醐

理性院藏

一男色繪 一卷

書 詳ナラズ

一説ニ鳥羽僧正覺融ノ畫ト云ルハ誤リニテ五百年代ノ畫ナリ一卷十三枚ノ内畫ハ十二段ナリ畫力俊逸浴室ノ構造及器物ニ少シ考證ニ具フベキアリ詞又優ナレド覺融時代ニアラザル卑俗ノ流言モ見ユ童子及法師原ノ衣服等モ其時代ノ風姿ヲ見ルニ少益詞ノ筆者モ願阿法師ニ似タリ

華族

片桐氏藏

一土蜘蛛草紙 一卷

書 越前守長隆 詞 兼好法師

高野山

地藏院藏

一弘法大師行狀圖繪 六卷

七二九

書 越前守行光 詞 深心院關白道嗣公

卷一 大師誕生 幼稚遊戲 四王執蓋 誓身捨身 明敏篤學 聞法受法 出家授戒

明星入口

卷二 天狗降伏 我拜師山 久米寺 東塔心柱 大師入唐 入唐着岸 入唐入海 五筆和尚號

虛空書寫

卷三 渡天 禮拜釋尊 大師入壇 珍賀怨念 守敏遺諱法 道具相傳 惠果入滅 惠果影現

大師擲三鈷

卷四 歸朝上表 參詣御廂 高雄灌頂 兩帝灌頂 高野尋入 巡見上表 丹生託宣

大塔建立

卷五 秘鍵開題 權者自稱 守敏降伏 大峯修行 久米寺講經 神泉苑 東寺勅給

稻荷契約

卷六 宗 論 仁王經法 後七日法 門徒雅訓 入空留身 唯我喪禮 高野珍瑞

大師號

一弘法大師行狀記

十二卷

東 寺 藏

書 大藏少輔行忠 中務大輔久行 南都繪師祐高法眼 大進法眼 定阿彌 繪師采女

正

考古小錄ニ光信ノ書ト記セシハ寺僧申傳ノ誤リ也詞書ハ

一 大覺寺深守親王 二 一條前中納言公勝 三 六條中將有孝

五四 後押小路内大臣公忠 六 二條中納言爲重 七 四辻儀同三司季顯

八 成就院大僧正果守 九 靈山僧正實嚴 十 大炊御門三位入道明證

十一 青蓮院道圓親王 十二 二品尊道親王

好古書譜ニ四辻儀同三司善成公ト記ス今寺傳ヲ探ル

東京

前田健次郎藏

一弘法大師行狀記 一 卷

書 土佐守光顯 詞 頓阿法師

書 詞筆者共秀逸ナレド惜ヒカナ殘闕タリ

一 光明眞言繪詞 三 卷

書 豐後法橋 詞 二條中納言爲重

此繪詞一號ヲ光明眞言功德辭ト題ス書法巨勢派筆力拔群タリ就中書體他卷トハイタク
字太ク見事ナリ奥書ニ曰

右壹部三卷東山八坂吉祥園院常住繪也

應永五年二月 日

一 融通念佛緣起 二 卷

洛北大原 來 迎 院 藏

繪 土佐將監行長 詞 筆者不詳 書力遒勁古色愛スベシ

一 融通念佛緣起 二 卷

洛西嵯峨 清 涼 寺 藏

書 繪所預土佐守行廣 兵部少輔入道寂濟 同 備後守光國

太夫法眼永春 粟田口民部卿法眼隆光 修理亮行秀

詞 後 小 松 天 皇 二 品 堯 然 親 王 青 蓮 院 尊 應 准 后

圓 滿 院 僧 正 尊 信 二 條 大 納 言 比 丘 聖 意 清 水 谷 三 位 中 將 實 秋

興 福 寺 別 當 僧 正 光 曉 東 大 寺 尊 勝 院 僧 正 忠 慶 以下下卷 征 夷 大 將 軍 足 利 義 持

前 天 台 座 主 尊 道 親 王 佐 々 木 入 道 宗 壽 細 川 右 馬 頭 入 道 道 欽

赤 松 入 道 性 松 聖 護 院 准 后 道 孝 尊 勝 院 僧 正 忠 慶

奥書 應 永 廿 一 年 十 二 月 十 七 日 禪 住 房 法 印 承 盛

一 大 臣 影 二 卷 近 衛 家 藏

書 豪 信 法 師

紙本淡彩畫力拔群也豪信ハ繪法印ト稱ス藤原信實朝臣ヨリ六代ノ裔從三位右馬頭爲理
卿之三男少納言爲量ノ弟ナリ圖スル處ノ大臣ハ左ノ如シ

上卷 花 山 院 左 大 臣 家 忠 花 園 左 大 臣 有 仁 中 御 門 右 大 臣 宗 忠

宇 治 左 大 臣 賴 長 八 條 太 政 大 臣 實 行 中 院 右 大 臣 雅 定

德大寺左大臣實能	京極太政大臣宗輔	九條太政大臣伊通
三條內大臣公教	大炊御門右大臣公能	中御門內大臣宗能
中御門左大臣經宗	福原太政大臣清盛	花山院太政大臣忠雅
土御門內大臣雅通	妙音院太政大臣師長	小松內大臣重盛
八島內大臣宗盛	德大寺左大臣實定	冷泉內大臣良通
三條左大臣實房	後花山院左大臣兼雅	禪林寺太政大臣兼房
中山內大臣忠親	六條太政大臣賴實	土御門內大臣通親
大覺寺左大臣隆忠	坊城左大臣實宗	花山院右大臣忠經
近衛右大臣道經	八條左大臣良輔	野々宮左大臣公繼
坊門內大臣信清	淨土寺太政大臣公房	鎌倉右大臣實朝
近衛左大臣家通	後久我太政大臣通光	西園寺太政大臣公經
大炊御門右大臣師經	醍醐太政大臣良平	常盤井太政大臣實氏

後土御門內大臣定通	月輪內大臣基家	淨土寺右大臣實親
嵯峨內大臣家嗣	衣笠內大臣家良	德大寺太政大臣實基
後花山院太政大臣定雅	冷泉太政大臣公相	九條左大臣道良
堀川內大臣具實	京極右大臣公基	山階左大臣實雄
後三條內大臣公親	香隆寺內大臣冬忠	後花山院太政大臣通雅
三條坊門內大臣通成	花山院內大臣師繼	後久我內大臣通基
堀川太政大臣基具	西園寺太政大臣實兼	嵯峨太政大臣信嗣
山本太政大臣公守	土御門太政大臣定實	後德大寺太政大臣公孝
二條太政大臣實重	竹林院左大臣公衡	栖心院內大臣內實
淨明寺左大臣經平	後岩倉內大臣具守	後山本左大臣實泰
今出川右大臣公顯	押小路內大臣公茂	花山院右大臣家定
六條內大臣有房	後一條坊門內大臣通重	後花山院內大臣師信

光福寺内大臣冬氏 今出川右大臣兼季

奥書

大臣影豪信法師筆也銘染筆了不可出國外也

又大臣八十人像藏在陽明藤太閣之家焉其像則僧豪信所書其跋語未詳其人也云

一八幡宮緣起 五卷

河州

譽田八幡宮藏

書 土佐彈正忠廣周

跋 先年當社參詣之時拜見緣起三卷處事略繪不周備仍拾舊本之遺更致新寫之切益顯既往之靈驗爲備將來之龜鑑謹寄進寶前數奉仰玄鑒者也

永享五年孟夏廿一日

征夷大將軍左大臣兼右近衛大將源朝臣 義 教

一八幡宮緣起

清水村

正法寺藏

書 土佐彈正忠廣周

跋語 前同斷同將軍義教公石清水八幡宮へ寄附スル處ノ同物ナリ

江州

石山寺藏

一石山寺繪緣起 五卷

此緣起ハ中比散失シテ闕卷タルヲ以テ補綴セリ故ニ書者ニ年代ノ相違アリ詞筆者モ又

同シ

卷一二 書 高階右近將監隆兼 一説 粟田口隆光 詞 石山座主果守僧正

卷四 書 土佐刑部大輔光信 詞 二條中納言爲重

卷五 書 粟田口法眼隆光 一説 土佐光茂 詞 三條西内大臣實隆

一石山寺繪緣起 七卷 同 寺藏

卷一 繪 狩野牧心齋安信 詞 水無瀬中納言兼俊

卷二三 繪 土佐左近將監光起 詞 飛鳥井中納言雅章

卷四五 繪 土佐左近將監光起 詞 飛鳥井中納言雅章

卷七 繪 谷 文 晁 詞 飛鳥井中納言雅章

洛寺町

十念寺藏

一佛 鬼軍繪 一卷

書 宗純一休和尚 同共

紙本淡彩一休ノ時代ヨリ古ク繪又妙ナラズ書モ同師ノ風体ニ非ラズ其意匠ノ奇態ナルヲ以テ斯ク名付タル歟寺傳ニヨリ一休ノ筆ト世ニ知ラル

一地藏緣起 六卷 洛西 壬生寺藏

書 蟄川新左衛門親當 書共

親當號知蘊ハ帶刀亟親俊ノ子也書ヲ能シ和歌ニモ達シ家集アリ此緣起繪ハ素人ニシテ妙タラズト雖モ靈驗中史補ニナスノ文不少也

一百鬼夜行 一卷 宮内省御物

書 姉小路越前守長隆

一百鬼夜行 一卷 大德寺内 眞珠庵藏

書 刑部大輔光信

一古樂圖 一卷

書 不詳 書 後花園天皇宸翰

初メニ樂器之圖十四種ヲ摸シ次ニ舞樂之圖三十六無名之圖六種ヲ載ス奥書アリ

三條宮書御室給舞銘當今宸筆

寶德二年九月 日

一延曆寺繪詞 一卷 東京帝室博物館藏

書 刑部大輔光信 詞 筆者不詳

一名天狗草紙ト云紙本着色精緻ニシテ逸品タリ以奥書可知也

此延曆寺緣起一軸者土佐將監光信畫圖絶妙非庸流之所及也遂援筆解他日之感云

寛文戊申年陽月下泔 狩野法印探幽

一清水寺緣起 三卷 東京帝室博物館藏

繪 刑部大輔光信

洛東清水寺ノ緣起ニシテ天保十五年京都所司代酒井若狹守事故有之所有ニ歸シ近比博物館ノ藏トナル故ニ外題及光起 證狀等ハ清水寺ニ今以テ殘レリ此ノ詞筆者ヲ倭錦ニ

四筆トセシハ六筆ノ誤リニテ左ノ如シ

卷一 近衛關白尚通公 中御門大納言宣胤卿

卷二 三條西内大臣實隆公 東山左大臣義政公

卷三 三條太政大臣實香公 甘露寺大納言元長卿

一融通念佛緣起 一卷 洛東 禪林寺藏

繪 刑部大輔光信 詞

書力絶妙清凉寺ヨリ勝レタリ

一執金剛神緣起 一卷

繪 刑部大輔光信 詞 一條禪閣兼良公

此卷聖武天皇東大寺御幸之圖ニシテ後世ヲ以テ古代ヲ書ク探ル處少シ

一一一尊院緣起 二卷 嵯峨 一一尊院藏

書 刑部大輔光信 詞後柏原天皇 三條西内大臣實隆公 三條太政大臣實香公

一狐草紙 一卷 稅所篤藏

書 刑部大輔光信 詞

小書卷ニシテ無類ノ佳品タリ冷泉爲恭ノ舊物ニシテ横死ノ期所持シアリシヲ大和邊ノ賣人ノ手ヨリ稅所氏得ル處珍奇也

一勸修寺緣起 一卷 山科 勸修寺藏

繪 良次 詞 甘露寺大納言親長卿

此繪師良次ノ姓氏不詳大永前後ノ人也 洛東 高臺寺藏

一新三十六歌仙像 一卷

繪 刑部大輔光信 歌 筆者不詳

一兩槐門圖 一卷

繪 成興院本槐門皇嘉門院新槐門ノ圖ナリ跋ニ云大永甲申應鐘戊申城南新林孤槐胸家居士筆舊本ヲ寫ス處九條尚經公ノ眞名序アリ

一眞如堂緣起 三卷

繪 掃部助久國 詞 青蓮院尊鎮親王

洛東 眞如堂藏

跋此繪三卷住持昭淳僧都命畫工掃部助久國令圖之於詞者古今見聞之靈驗等粗抽詮要法務前大僧正公助草之誠是寺家未來際之珍奇也道俗貴賤一見之輩須爲減罪生善往生極樂之良因而已干時大永四歲次甲申八月記之

遍照金剛入道親王尊鎮

一釋迦緣起 六卷

畫 狩野法眼元信

嵯峨 清凉寺藏

一西行物語 四卷

書 海田采女正相保 書 二條關白政家

西京 田中教忠藏

好古小錄ニ云西行物語四卷畫海田相保一卷存餘不傳ト載セタリ此卷奥書ニ畫者海田采女佑源相保明應龍集庚申上陽月中浣槐下沙門書トアリ畫ノ緻密ナラズ同卷華族津輕家

ニアレド未見ナレバ評ヲ加ヘズ元來ハ冷泉爲恭ノ所持ニテ雨森白水翁ニ傳ヘ轉々シテ田中氏ノ有ニ歸ス卷跋ノ破紙ニ少シ疑惑ヲ加フ黒川眞頼氏モ同感ナリ

一桑實寺緣起 二卷

繪 土佐刑部大輔光茂

詞上 後奈良天皇宸翰 下三條西内大臣實隆

跋近江國滋賀郡桑實寺天智天皇御願定惠和尚開基也云々略之

天文元年八月十七日

征夷大將軍權大納言源朝臣 義晴

一日蓮上人注畫讚 五卷

畫 窪田藤右衛門統景 詞 大僧都日政

京堀川 本園寺藏

跋天文五年申初秋於若州長源寺書之畫工窪田藤右衛門尉統景勸發師安立院大僧都日政

一酒吞童子繪 三卷

畫 土佐左近將監光元

詞上 二品良尙親王 中西園寺左大臣實晴 下中院大納言

洛北 曼珠院藏

通統

一 弘法大師行狀記 十二卷

東寺 觀智院藏

繪 土佐左近將監光吉

詞一 大覺寺一品空性親王

二 日野新中納言光廣

三 照光院准后道澄親王

九四 舟橋式部少輔秀賢

五 近衛准后信尹

六 近衛禪闍前久

七 高倉右衛門佐永慶

八 中院左中將通村

十 阿野中將實顯

十一 青蓮院尊朝親

十二 曼珠院良恕親王

外題者持明院權中納言基雄卿筆

一 弘法大師行狀圖繪 八卷

東寺 觀智院藏

書 熊谷可昌

詞書ナシ

繪マタ佳ナラズ

一 蘆屋釜ノ圖 一卷

東京帝室 博物館藏

書 刑部大輔光信 芦屋釜數種ノ下繪タルヲ以テ白描ナリ

一 神泉苑緣起 一卷

神泉苑藏

書 左近將監光吉 詞 勾當内侍

元祿五年京都町奉行小出淡路守寄附之

一 病草紙 一卷

書 土佐守光貞 斷闕ニシテ饑人屍ヲ喰フヨリ五段アリ畫力奇態頗ル逸品ナリ

一 融通念佛緣起 二卷

並岡 法金剛院藏

書 住吉如慶 詞 八條宮知忠親王

一 紀中納言物語 一卷

書 長谷雄卿朱雀門ノ上ニ於テ鬼神ト雙六ノ勝負セラレ美女ヲ得鬼神ハ約

ヲ違ヘ水ト消シタル物語畫ニシテ妙ナラズ

一法金剛院縁起 一卷

法金剛院藏

書 海北友松

一職人盡歌合繪 一卷

書 狩野永徳法印 歌 烏丸大納言資慶卿 左右二十四番歌ハ題月
卷首醫師 村雲のかゝれる月のくすりにはよものあるしそなるへなりけり

此職人盡歌合ハ種々類ノアル繪卷也

一三節會御膳圖 一卷

書

正月三日節會御膳供進之次第也馬頭盤木菓子八種晴御膳腋御膳進物所御菜御厨子所御
菜三節酒御酒盞等ノ圖ヲ掲グ奥書ニ曰

右正月三節會晴御膳腋御膳圖依貫首仰進獻如件

元祿三年庚午八月廿九日

御厨子所預 紀 宗 恒

一十二月繪 二卷

寺町 妙満寺藏

書 土佐光高 和歌 妙法院堯延親王外十一人寄合書鮮麗云フ斗リナキ美卷ナリ

一女房卅六歌仙繪 一卷

書 烏丸大納言光廣卿 歌共

紙本墨書 一人毎ニ三角ノ内ニ光廣トアル墨印ヲ押ス

一太平記畫 二卷 三時知恩寺藏

繪 鹽谷高貞出雲沒落之段中比ノ繪也

一三論繪 一卷 三時知恩寺藏

書 上戸中戸下戸ノ論戲畫ナリ

上馬町 西林寺藏

一法然上人傳繪 一卷

書 修理亮光弘 繪ハ佳ナレド殘闕ナリ惜ムベシ

洛北大原 寂光寺藏

一小原御幸繪 一卷

- 書
- 一善界坊繪 二卷 曼珠院藏
- 書
- 一金山天王寺緣起 一卷 盧山寺藏
- 書 一段狩野元信 二段土佐光信 詞 三條西入道仍覺 外題 後奈良天皇宸翰

緣起之部

一四天王寺緣起

寫

一卷

聖德皇太子御撰

四天王寺法號荒陵寺荒陵鄉東建立故以處村字號寺名發願四大天王故曰四天王寺東西八町南北六町乾角建施藥院良角建悲田院北中間建療病院是三院在寺垣外守屋臣討伐而其子孫從類二百七十三人永為寺奴婢沒官所領田園十八萬六千八百

九十代定永財寶塔一基金堂講法堂步廊二重中門寶幢肆基四大門食堂僧坊二條甲藏政所町雜倉十六字大衆町炊屋大屋食備屋藏二字別所厠屋一字四方垣廻四百八十五丈四尺也次ニ寶物田園等ヲ舉グ奥書ニ乙卯歲正月八日佛子勝鬘トアルハ推古天皇即位三年太子御歲二十三歲ノ御時也編中朱ノ御手印二十六箇所ニ押シタルヲ以テ御手印緣起ト稱ス跋ニ曰

是緣起文納置金堂內濫不可披見手跡狼也

此卷四天王寺隨一ノ寶物也後醍醐天皇宸翰御寫ニ

建武二年乙卯五月八日拜見之同月十八日書寫之權者之聖跡輒不可披閱仍爲擬

正文令染短筆自今已後不可出堂內矣

右寺院田園任記文可與隆之雖爲段步有遲濫之地者速加朝威可令全施入地者也抑當寺佛法最初之靈地王道擁護壇場也若非此寺者可歸何寺乎寺院再興與朝家之再興時運相應者定復古跡歟正法紹隆万姓利益偏助成彼曩願敢

不_レ加_二朕新意_一而已

乙卯歲孟春八日乙卯歲仲夏八日不測而歲日相合似_レ有_二冥應_一矣

一小松寺緣起

寫

一卷

河内國交野郡上ノ山ニアリ元號荒山寺其形八葉ニシテ如_二已削成_一似_二靈山_一此峯ニ古松アリ菩薩遊戯ノ處也和銅五年四月十八日田原郷人字紀八其子若石丸宗次郎其子熊王丸中次郎其子松若丸此三童子入_二彼山_一建_二方五尺草堂_一請_二僧圓舜_一本尊石佛ヲ供養ス其後養老年中爲_二雷火_一燒亡同七年七月十三日爲_二建立_一引地ノ時地ノ下ニ有_二石硯一面_一有銘天長地盛白衣菩薩弘法利生ト諸人隨喜天平元年爲_二地震_一破壞天長元年再立承和四年火亡同十二年清原行光成_二大願主_一成就其後延長八年正月小松景光ノ靈佛果ヲ得ル事又奇瑞ノ小松生出是ヨリ小松寺ト改號此時ノ供養文ハ紀納言ノ作也承平元年正月藤井清光金堂ヲ造リ天慶二年八月紀行將講堂ヲ立安和元年七月食堂成就承曆四年二月毗沙門堂造立其後大治五年九月大地震堂舍吹崩沙門觀圓勸進再建狀次ニ奉加帳ヲ載ス二月會諸

卿寄附書ナリ久安二年二月勅宣二通承久二年開御帳ノ事ニ了承久二年二月書之

一廣隆寺緣起

寫

一卷

山城國葛野郡楓野大堰郷廣隆寺來由之記當寺五寺號アリ秦公寺桂林寺三槻寺蜂岡寺コレナリ推古天皇三十年大花上秦造河勝奉爲上宮太子所建立也本尊金銅彌勒菩薩像者推古天皇十一年自百濟國王獻之聖德太子觀音像者同廿四年自新羅國獻之藥師如來者向日明神權化神作也此三尊則本尊トス以下諸佛ノ來由並奇瑞及諸堂諸院ノ記事鎮守三十八所之事秦氏ノ系圖廣隆ハ河勝ノ諱也永萬元年供養ノ記

明應八年七月

權僧正

濟承記之

當寺ノ中興少僧都法眼道昌ノ傳次ニ寺外末寺並別院ノ次第寺領庄園等之事埋木地藏緣

起_レ寬喜二年

抑當寺ハ弘仁九年四月十九日天祿二年七月五日久安六年正月十九日三度火災文明三年

月八日同七年八月六日兩度大風ニテ吹倒スト云々

一 觀心寺緣起

寫

一

卷

卷首觀心寺緣起實錄帳ト記ス寺壹院 在河内國錦部石川兩郡南山中 合山地千五百町

町
承和三年閏三月十三日 官符始云雲心寺弘法大師開基承和四年三月三日眞雅實惠兩僧ノ勘錄也奥書ニ曰 此緣起於正本者在江州石山寺經藏仍稱座主相承不出門外殊以令秘惜云々 然者於向後者併以寫本擬正本可備鑑鏡者也

應永元年十月十五日 注子細矣

太上天皇熙成 花押

一 神宮寺伽藍緣起

一 卷

卷端曰桑名郡多度寺鎮三綱謹牒上

延曆五年長官紀相臣佐婆鷹介井上直牛甘大目大伴直赤椅少目春戶村主廣江等任時所進也錄スル所ハ天平寶字七年十二月滿願禪師造佛ノ次第ヨリ寺内ノ資財顯注ス第一佛物佛像第二塔二基第三法物第四布薩調度第五樂具第六僧物第七供神料器第八通物第九大衆經卷

第十鋪設等奥書ニ曰延曆廿年十一月三日願主沙彌鎮脩行住位僧知事脩行入位僧連名檢

察伊勢尾張之大小國師僧綱以下連署悉ク僧綱之朱印ヲ捺押セリ

一 多武峯緣起

破裂記附錄

一 冊

權大僧都宜賀 撰 天保庚子冬十二月撰者小跋

藤氏ノ始祖鎌足公誕生ヨリ入鹿父子ノ惡逆天智帝鎌足ト謀リ大極殿ニ誅スルノ始末白雉三年山階寺建立天智天皇八年十月十六日薨去攝津國島下郡阿威山ニ葬ル後其男定慧和尚唐ヨリ歸朝大和國今ノ多武峯ニ其靈墓ヲ移ス和銅三年興福寺建立維摩會ノ事實性僧正増賀上人之事等迄記ス尊影破裂ハ昌泰元年ヨリ慶長十二年ニ至リ凡三十五度也悉ク事變アリ告文使登山ノ次第ヲモ録セリ

一 延曆寺護國緣起

寫

二

冊

上卷ハ日吉山王七社之事下卷ハ朝家常寺ヲ以テ他ニ尊崇ノ超過之條々ヲ擧ゲ末ノ四條ハ眞言宗東寺ヲ嘲ルノ事多キ中ニ勤操僧正弘法大師ヲ以テ傳教大師ノ弟子トナシ又ハ

眞言宗ノ御修法ハ比叡山ニ濫觴スナドノ文ヲ記シタリ奥書ニ曰

於武州兒玉郡金鑽宮大光普照寺一乘院談所居住之間賜小濱普門寺源叡法印御本書寫
了右寫本者金鑽第六番住持法印蓮討御自筆也

文安四年卯六月十七日

天台沙門大貳智叡

一清水寺緣

三卷

別當僧都覺源 撰

大和國高市郡八多郷小島寺超忍大德ノ門子延鎮光仁天皇御宇寶龜九年四月八日觀音ノ
靈告ニヨリ初而音羽山下瀧水ノ側ニ草庵ヲ結ブ事行叡居士教待和尚之事延曆二年坂上
田村鷹延鎮ニ逢ヒ給フ事田村丸室家三善高子觀音ノ靈符ニ依テ病腦平癒清水寺建立之
事化僧千手觀音ノ像ヲ作ル事桓武天皇御腦延鎮爲加持奇驗有之事子安ノ塔ノ事田村丸
夷賊征討觀音加被力ノ事延曆十四年十月十四日太政官符清水寺四至ノ事弘仁八年當寺
住侶慶兼阿闍梨西門ノ二天王造立ニ付靈驗ニ預リシ事延曆十八年藤原公教觀音ニ祈禱

シテ男子ヲ得ル事同二十年源秀顯女子ヲ得ル事左衛門尉家光美女ヲ得ル事田村丸鈴鹿
山ニ於テ奇賊ヲ追討靈驗ヲ蒙ル事大同元年紫宸殿ヲ賜リ本堂トナス事坂上家系譜田村
丸略傳弘仁四年八月右兵衛尉康定渡唐歸朝之砌於洋上靈驗ヲ得瀧宮ヲ建立スル事貧女
良緣ヲ得ル事

坂上末孫清水寺別當僧都覺源頽齡八十三誌之 追加上總景清主馬盛久被助命ノ事

奥書 建久元年三月十八日清水寺別當僧正覺眞記焉 續追加左大臣家光公御母堂當寺御信

仰大樹諸堂ヲ再建シ給フニ了 貞享三年上梓

一高山寺緣起

寫

一冊

沙門高信 撰

自序ニ曰夫當寺者曩昔之聖蹟往古之靈地也本是雖爲愛宕山之一谿神護寺之別院荒蕪
歲舊號堂閣跡空廢絕日久號梵鐘響斷而明惠上人住居之後佛日再留影法雨重播霑伽藍
復舊興隆是新依之

土御門院御宇去建永元年丙寅十一月被下

御鳥羽院院宣以此梅尾寺院山内別賜明惠上人仍以此所永為華嚴興隆之勝地寺號高山寺
後堀河院御時去寬喜二年庚寅閏正月被下太政官符為備萬代之證據被定四堺之勝示畢細碎
事如左錄矣

政建長五年辛丑三月日依蒙 仰隨勘得粗註置之

沙門 高信

此緣起ニ記スル處當寺此比ハ金堂阿彌陀堂羅漢堂三重寶塔經藏二字鐘樓鎮守社壇四字
大門禪堂院石水院禪河院等アリ又平岡善妙寺ノ事以上其來由及本尊其外建立ノ且那年
月等ヲ委シク記シ卷末ニハ紀州處々ノ遺蹟ヲ舉グ

一大峰山藏王堂緣起

寫

一卷

青蓮院尊朝親王 撰

當山ハ天智天皇ノ御世役行者開基ニテ其後延喜帝ノ御時聖寶尊師中興ス然ルニ七百年
餘リ大破ヲ造營セント勸進ノ為メ撰述ノ書ニテ此權現ハ惡魔衆生濟度ノ同緣ヲ經中ヨ

リ抄出スルニ役行者ノ誕生ヨリ其靈瑞ノ粗増ヲ略記セリ

一石清水緣起

二卷

山城國綴喜郡男山八幡ノ緣起ニテ其記スル處ハ仲哀天皇崩御ノ事神功皇后備後ノ海ニ
テ御危難ノ事門司ノ關ニテ老翁不思議ノ事三韓降伏ノ事皇后新羅國ニ碑石ヲ殘シ給フ
事應神天皇御降誕ノ事宇佐八幡宮御造立ノ事護國靈驗威刀神通大自在王菩薩ト御託宣
ノ事和氣清麿ノ事行教和尚神託ニ依テ男山八幡宮御遷座之事

一白峯寺緣起

寫

一冊

少納言清原入道常窓 撰

讚岐國白峯寺ハ弘法大師此山上ニ寶珠ヲ埋メ阿迦井ヲ穿リ行給フ後智證大師發願貞觀
二年四十九院ヲ草創シ千手觀音ノ像ヲ安置ス保元二年八月三日崇德天皇此所ヲ行在所
トナシ三箇年ヲ送リ給フ其後國府中知郷鼓ヶ岳ノ御堂へ御遷座長寬二年八月廿六日崩
御安元三年七月廿九日御追號社壇ヲ建立治承ニハ青海河内文治ニ北山本ノ地等ヲ御寄

進五部大乘經御書寫之事土御門天皇ノ御事爲義爲朝影像之事永徳二年十月十九日火災細川頼之夢想之事

奥書

當寺事代々舊記雖有之未載緣起之間今度再興之次以記錄等奉示清少納言入道常憲草之侍從行俊卿清書爲後證註之

于時應永十三年孟秋廿五日

一三井寺假名緣起

寫

一卷

此編は天正七年七月十五日京より來りし女人當寺の鐘をつきけるに其まゝ聲とまりぬこれ先代にもありし凶事にて三の不思議あり第一程なく讒言にて堂舎僧房破却せらるる事第二經論聖教燒失の事第三照高院道澄准三后遠行御弟子二品親王興意師教をうやまひ給わず寺中不折合の事をしるす

右古本爲人被失借廿々年餘不得尋處不慮求之令書寫者也

明曆第三丁酉十一月吉日

僧正 長

圓 七十七才

一千光院緣起

寫

一卷

讚州屋島寺ノ由來記ニシテ開基は鑿真和尚也其後弘仁元年二月弘法大師建立ス當院應和安和天福年間奇瑞條々ヲ擧グ奥書ニ曰

于時治安元年三月九日

屋島寺 南西山 性 純 花押

一象頭山緣起

寫

一卷

讚州那珂郡象頭山金光院則金毘羅神社ノ由來記也
跋右緣起應金光院權大僧都法印宥寬之求請誌焉

前南禪見僧錄最嶽元良

一金剛院緣起

寫

一卷

中山素行 書
丹後國加佐郡鹿原村慈恩寺金剛院ハ天長六年淳和天皇ノ勅命ニ因テ眞如親王伽藍創建

シ勅願ノ道場トス貞觀四年十月親王求法ノ爲メ御入唐元慶五年十月五日天竺羅越祇園ニ於テ薨御遺骨ヲ當山西南ノ嶺ニ埋メ奉リ令字王塚ト云天安年間文德天皇水田五百五十町四段百八十步勅賜アリ永保年間白河天皇御再建奉行ハ刑部卿平忠盛也其由來ノ古文書ハ天正年間兵燹ニ罹リ焼失ス文祿年間子院多ク廢絶セリ元祿十一年九月舊記ヲ摘録了是古縁起ノ焼失セシヲ以テ也云々

一南都大佛縁起

三冊

卷端聖武天皇金銅勅願文

天平十八年大佛鑄像スル事七ケ度マデ端正ナラズ天平勝寶元年又鑄テ成就セリ同四年四月九日開眼供養ノ事良辨僧正行基菩薩婆羅門僧正等ノ事陸奥國ヨリ黄金ヲ貢スル事光明皇后ノ事治承四年十二月廿八日平重衡東大興福二大寺ヲ燒ク尋テ平家亡滅ノ事建久六年三月十二日大佛殿再興供養ニ付後鳥羽天皇行幸ノ事ニ了龍松院崇憲後叙

天明三年癸卯冬 上梓

一瑞泉寺縁起

寫

一冊

尾州丹羽郡犬山庄青龍山瑞泉禪寺ノ由來記ニシテ當寺ハ應永二十二年日峯和尚創建スル處ナリ日峯ハ洛西妙心寺ノ中興大濟禪師ノ事ナリ附記ニ瑞泉寺物語アリ卷末ニ當寺十景ノ詩ヲ載ス僧象海ノ題スル處ナリ

一三輪若宮縁起

寫

一冊

木瀬三之 撰

三輪大明神ハ大物主命ノ神ナリ其御子大田田根子則若宮ナリ此神ノ三輪山ニ隱レマシテ終リヲ見セ給ハザルノヨシヲ記シ三輪明神ノ舊事記古事記日本紀ノ三本ニカワリノ義ナドアラノ書載ル

延寶七年己未四月廿二日謹記

一妙音山縁起

寫

一冊

山城國乙訓郡山崎觀音寺ノ由來記ニテ本尊觀世音ハ聖德太子ノ作ナリ此時ノ住僧以空

ハ後水尾天皇以來五朝ノ御歸依僧タルヲ以テ此緣起ノ外題ハ今上皇帝ノ御宸筆タリ奧書ニ曰

正徳元辛卯曆明景穀旦

正二位前大納言藤原公通書

增補續群書一覽 卷第十二

醫書之部

西京 西村兼文編輯
文學士 入田整三校訂

一金 蘭 方 寫

殘闕 十九卷

從五位下東宮坊主膳正兼攝津大目菅原宿禰峯嗣

從五位下醫博士兼侍醫物部朝臣廣泉

從五位下典藥頭當麻真人鴨嗣

從五位下典藥正大神朝臣庸主

以上奉勅同撰

金蘭方序

夫以濟世利物者至仁之用也 臣峯嗣自製封己降雖恒念能俾宇內黎民無恙智才蒙昧而無

濟人之急尤愧不能為良醫乎然先入之志倦々乎不息每見於海內方書則購而藏之至方之奇又有効者則珍而錄之殆于今數載也維崑

上皇就痾國手調進之劑會無寸効剩腦勢垂危而各拱手矣於是療議既穰躬言超邁於群議而至感服也天哉不數貼而發申以得奇驗也

上皇不勝於

叡感仍治國之餘澤在

勅命臣峯嗣等撰此軸以於俾萬民之濟救之也然於醫之道漸雖微而難辨事也頗彷彿將相任而實懼係於殺活之權雖固辭以慈惠之深與受於三顧之命不已二三之會首於金蘭而博求方術以濟人利物為心一勵仁恕之心而其指歸取要聖賢之事竟以成快務哉此卷也一方一論皆已試而後錄之矣蓋施藥限千一方傳方有于天下起天下疲瘵民而咸躋於仁壽域過思半乎今哉奉

勅臣從五位下東宮坊主膳正兼攝津大目菅原朝臣峯嗣從五位下醫博士兼侍醫物部朝臣

廣泉從五位下典藥頭當麻真人鴨繼從五位下典藥正大神朝臣庸主等同撰而上

朝叡感之餘辱賜題金蘭方云嗚呼蒼生之幸甚也矣于時貞觀十戊子年九月一日臣峯嗣欽

序

今書中存スル處ハ卷一 一二三 卷三 八 九 卷四 十二 十三 卷五 十六 十七 卷六 廿二 廿三
以上十九冊五卷也香紙墨書典藥寮ノ朱印ヲ紙中殘ラズ押捺シタリ

一衛生秘要鈔

寫

卷

竹林院左大臣公衝公 撰

此編三十一卷ヲ一卷ニ爲ス今此書ハ享保元年二月近衛豫樂院家熙公紺紙金泥ノ添書ノ
奥書ニ伏見院ノ叡覽ニ入レ奉リシ事及左大臣公衝公ノ小傳ヲ舉ラル家熙公廿七歳ノ御
作進タリ又本編ノ奥書ニ云 正應元年八月七日皇后宮權大夫西園寺公衝公抄寫進 丹波行長

大膳權大夫丹波盛長加一見之

延文六年正月中旬作加一見

權侍醫丹波嗣長 花押

一醫略抄 寫 一冊

七六六

典藥頭丹波雅忠 著

此書ハ晋唐ノ醫書三十四部中ヨリシテ單捷ノ方ヲ集メ急病ヲ治スル爲ニ撰ム其方悉ク奇驗ノ方ニシテ所引ノ書多クハ今ニ傳ラザルノ書ナリ古方ヲ講ズルノ人必讀ノ編タリ按ズルニ雅忠ハ丹波宿禰康賴四代侍從重明ノ孫典藥頭從四位下忠明ノ子ニシテ正四位下右衛門佐兼典藥頭延年間高名ノ大醫タリ

一頓醫鈔和解 寫 七冊

梶原性全 著

此書一名性全集ト號ス本文ノ漢字ヲ國假名ヲ以テ和解セリ蓋シ只其大要ノミナリ奥書于時天文四乙未六月廿日世間旱魃及萬民迷惑者也凌炎天以右本令書寫畢右筆孤白

一香字抄 寫 二卷

一藥字秘寫 三卷

此編ハ香數ノ合法方其藥料ノ原種ヲ委詳ニ注シ中ニハ略圖ヲ以テ示スアリ佛家必用ノ書タリ

取右合爲五卷此抄元是丹波家之抄物也今類聚加新注也永萬二年九月以相公禪門之本更

補闕事

右建長二年高山寺目錄注進之 沙門勝賢 花押

一三位法眼家傳 秘方百廿種 寫 一冊

此三位法眼ハ其氏及諱ヲ知ラズ奥書ニ曰

右百廿種家之用付ル様之事也

于時永祿三庚申曆艷陽吉日禿筆信州窪寺月輪寺住侶多門坊秀盛后形見

一馬島家傳 眼目良藥秘書 寫 一冊

此篇ニ舉ル處ノ眼病ノ種類ニハ

病目 虛眼 カニ目 風眼 血眼 眼腸 膜目 星眼 虫目 痘瘡目 刺目 輪目

七六七

疾目 内瘡 疖目 外瘡 癩病目 胎毒 小兒 疵目
以上ノ藥方ヲ記シタリ

一 櫟窓類鈔 寫

八十冊

多紀櫟窓 著

此書ハ儒書ノ中ヨリ醫道ニアヅカリタル事ヲ摘出シ類ヲ以テ纂輯シタルモノ也醫ノ政
令ヲ始メトシテ證治ノ方藥ノ事ハ云フニ及バズ書目醫傳並ニ詩文ノ類迄モ悉ク採入セ
ズト云事ナシ又博覽比ナキ編也

一 溫疫訓蒙 寫

一冊

狷乎堂公滲 著 文化丙寅臘月自序卷端ニ付ス

此編ハ初學ノ輩溫疫治術ノ大概ヲ知ラシメンガ爲メ五十餘ケ條ノ篇目ヲ設ケ其便トナ
ス

一 砦草

一冊

原 南陽 著

文化八年二月中山備中守信 多紀元簡屋代弘賢ノ三序立原翠軒萬ノ後叙

此書ハ一小冊ト雖モ陣中備急ノ良方ヲ記シ其用意ヲ示ス自序ニ云予ガ祖先ハ甲州ニテ
聞ヘアル人ノ後ナレド東國ニ流落シテアリケルヲ水戸ニテ士伍ニ列ルトアリ原虎胤ノ
末ナルニ哉四十五目ニ療方ヲ分チ簡單ニ録セリ

一 諸州採藥記 寫

九冊

植村左平治政勝 編

此書ハ享保五年庚子ノ春ヨリ寶曆三年癸酉マデ凡三十餘年ノ間武州駒場ノ御藥園御用
屋敷ノ預リ植村政勝採藥ノ台命ヲ承ケ奉リテ諸國ヲ遍リ巡行シ藥種ハ云フ迄モナク珍
木異草ヲ擧ゲテ書記セシヲ寶曆五年丙子ニ獻上スルヨシヲ述ベタリ

一 採藥便記 寫

三冊

梧陰庵光寧 著 寶曆戊寅三月漢字ノ自序

此書ハ享保ノ始メ東都ニ阿部友之進照任松平玄蕃重康ノ両士官命ヲ奉シ諸國ヘ出行シテ其國々ノ産物ヲ見出シ奇珍ノ品物ヲ貢獻セシ兩翁ノ口述ニ后光寧ノ副鑑シテ國分ニナシ其所産ヲ知リ易カラシメ且ツ本條ニ抵書シテ後藤氏ノ考述ヲ加ヘタリ

一草木性譜

五冊

清原重臣 著

文化八年臘月唐橋右大辨在經卿序文政六年中秋自叙凡例同年冬秦鼎漢字ノ後叙

此編中ハ専ラ草木ノ性質奇異ナル者其名稱ノ差謬ヲ考訂シ漢名ノ下ニ其名ノ出所ヲ註シ且ツ圖書四十八種ヲ模寫ス其圖ハ尾藩ノ寄合ナリ附記ニハ有毒草木圖說上下六十二品ノ圖ヲ掲グ

一麤麝考

二冊

大淵孟鴻常範 著

安政巳未喜多村直寛 田村充保ノ兩序蒲生重順跋

本編ノ概略ハ凡例ニ載セタリ首卷ニハ麤麝ノ二物本邦ノ産ヲ辨別シ數十ノ圖ヲ舉グ附録ニハ靈貓香ノ圖靈貓ノ圖同說獅貓等ヲ録ス

一靜の岩屋

二冊

平田篤胤 講説 門人町田弘道奥山正胤ノ序跋

此編一名醫道ノ大意ト號ス篤胤醫業ヲ以テ壯年マデ旨ト立シカ俗醫輩ノ風儀ヲ慨ミ且ツ醫道ノ本ヲ皇典漢籍ヨリ考ヘ簡易ニ俗謬ヲ正シ講説アリシヲ門人等聞書セシニ後ニ篤胤ノ加筆スル處ニシテ醫ヲ撰ニ便リアル書ナリ文化八年正月脱稿

一醫家古籍考

一冊

壺山逸人 著

卷端長谷川菅緒假名序次ニ附言及目錄アリ

此書ハ我國醫書古時ハ甚ダ多クシテ今世ニ存スル者少シ其殘闕ノ書或ハ古本ノ遺レルモノヲ博ク搜索シ且ツ我邦ノ撰述ノミヲ採用ス其各家ニ藏スルノ秘本ヲ克ク知リ得テ

舉ゲタルハ感ズベシ蓋シ大同類聚方ノ如キニ至リテハ二尊院所傳東寺所傳宇治本真田本畑本雲州杵築文庫本浪華吉田本備前田中本美濃大垣本錦小路家本其餘諸國散在ノ數本ヲ考案シ其中偽書ヲ分明ニス金蘭方以下六十五部ヲ詳細ニ記ス附録ニ醫方雜說アリ兼文按ズルニ爰ニ東寺所傳トアル大同類聚方ハ文化以來ニ散失セシ歟今該寺ニ所傳ナシ又梅尾高山寺所傳ニ名高キ丹波康頼ノ著意心方ノ如キモ既ニ散失シ錦小路家ニ納メタリト云々或ハ多紀氏ニ轉々セシト云所在ヲ失シ惜ムベシ御室仁和寺ノハ僥倖ニモ今ニ傳來シテ什寶ト成ル

管絃之部

一古本催馬樂

寫

一冊

此譜ハ堀河右大臣殿ノ流ニテ大宮右大臣按察使大納言藤大納言ト次第ニ所傳セラレシ譜ニテ藤原貞幹曰此譜藤伊達ガ本ヲ寫ス古本ノ影寫ナリ各字傍ニ拍子ヲ附ス是ニヨリ

ヲ推量スルニ風俗譜モ古本ハ斯ノ如クナラン今註セザルヲ見レバ相違アリ重テ考フベシ奥書ニ曰

天治二年春三月家說移野了口傳

已秘藏也不可有外見歟 鈴歟河 我家 大宮 奥山 奥山己上 澤田川 我駒 貫河

東屋 道口 逢路 鷄鳴 陰名己上 伴歌或絶後乃數十年或依不傳家說不書之

貞幹云風俗譜此譜原本ヲ見ザレドモ古本ナルベシ卷首一歌ノ下ニ朱點ノ法ヲ註シテ本ニ朱點ナシ按ニ何ノ家ニカアリケン本ヲ書肆愉寫シテ利ヲ計ル成ベシ他日古本ヲ得テ朱點ヲ補附スベシ明和未年余所傳寫ノ本天明戊申春在一友人ノ家化爲灰塵一字不存寛政辛亥冬以友人橘某氏本書寫壬子春日一校了 左京 藤原貞幹

一承和樂

寫

一冊

此書ハ舞譜ニシテ承和樂 葎歲樂 春庭花ノ三樂ヲノノ拍子ナリ悉ク其譜ヲ記シ舞ノ次第ヲ述ブ

一再興朗詠 寫

一冊

再興朗詠ハ九十首抄ノ中古譜ノ儘ニテ後世風ノ博士ニ移シタリ違サルヤウニ考古譜ニ
改言以下同トアル處斗ハ諸譜ノ趣ヲ以テ杜撰ニ定メ其味假名クバリナド都テ九十首抄ノ儘
ニテ臆斷セルナリ

今傳フル處ノ十首九十首抄ニ載タルヲ摹書シ傍ニ今ノ譜ヲカキテ扱古譜ノ趣ヲ考レバ
博士サヘアレバ分ル也其中如何ニモ解セザル事アリクアリ其趣ハ只古譜ノ儘ニ移シ
ヲキ感應ノ同好ヲマツナリ

今ノ郭曲花月ノ句ニ乏キ事人皆恨ル處ナリ故ニ四季ノ中旬ガラ雅致アリ博士モ慥ナル
ヲ撰拔テ今ノ博士風ニアラタメ猶又此中ヲエリテ再興セントメ數多ク寫シタル也必此
句ヲ皆再興セントニハ非ズ古譜ノ博士ヲ今風ニナホシタルマ、ニテヨクノ唱試サル事
ユヘ誤リ多シ一首ヲ再興セルモ大事ニテアルベケレバヨクノ唱合セテ後定ムベキ也

一教訓抄 寫

十冊

正六位上行左近將監狛宿禰近真撰

此編一名嫡家相傳舞樂物語ト號ス卷端假名自叙ニ云祖父ノ跡ヲ追ヒ曾祖父ノ記錄ヲ傳
ヘ得テ尤モ嫡家ノ流タリ而齡既ニ六旬ニ滿チ一兩ノ息男アリト雖モ道ヲ好ズ甚悲歎無
極者也仍テ子ヲ思フ道ニハ迷フナレバ少々記シ置舞樂ニ付各口傳物語ハ其數覺 居タ
ルヲ書之ヲヨクノ見覺ヘテ譜ヲ見ルベシ歌舞口傳五卷第一公事曲第二五ヶ大曲第三
廿二中曲第四他家舞曲第五高麗曲伶樂口傳五卷第六舞曲源第七管圖第八無舞樂第九打
物第十記錄此邊其舞曲ノ都度先蹤ヲ衆ク引ニ我朝ノ事ノミヲ舉グ

奥書天福元年癸巳六月日以自筆書寫了 正六位下行左近衛將監狛宿禰近真撰

一五節間郢曲事 寫

一冊

按察使俊豊卿 撰

丑日帳臺出御 殿上淵醉 唱歌 今様 萬歲樂 令月 新豊 蓬萊山 萬歲樂 水猿
曲 物云舞 白薄様 羈ノ聲入 等ノ節ヲ詳ニ記シ且右以永徳永享等嘉例注之由次ニ

裝束ノ事ヲ舉グ

右當家說雖禁外見依爲郢曲門第免申一覽之處剩被透字者也於末代正本可爲明鏡也

永正十一年六月一日

按察使俊量 列

這本子細見了右奥書者爲備後代龜鑑臨之尤逸少贋本也可禁外見而已

永正十一年夏六月一日

羽林藤基 規 列

一懷竹抄

寫

一冊

撰者知ラズ

調子合法 調子反音 管絃七聲 諸調渡物 橫笛大神基 篳篥權大納言定作 琵琶妙音院 箏上同

以上其傳ヲ舉ゲ舞ニ付タル音取 調子秘事 笛ノ譜並相傳人名 笛物語 大神氏家系

地下傳來 音律具類抄等ヲ記セリ

一安元二年御賀之記

寫

一冊

入道大納言隆房卿 編

此御記ハ隆房卿少將ノ時ノ假名日記也今年三月四日太上法皇五十年ノ御賀ヲ天皇ヨリ奉リ給フ處ニテ其日行幸ノ御列舞樂ノ次第御鞠遊ノ事管絃ノ事同五日後宴ノ次第等ヲ記ス

一要聚抄

寫

一冊

沙門膽惠 撰

此編ハ鞀鼓一鼓鉦鼓ノ秘說ヲ載セ其拍子ヲモ秘事ト雖モ錄セリ奥書ニ曰

文永八年辛未六月十二日比於南都東大寺南大門邊書寫之同年七月四日一校了

右要聚抄一卷者元就正四位上伊豆守太秦昌倫宿禰藏書令熟望謄寫訖于時享保十七壬子

歲四月下旬正五位下行左近衛將監豐原倫秋

一神樂注秘抄

寫

一冊

後成恩寺關白良基公 撰

右本明應九年卯月二日自後成恩寺御息竹內僧正御房借給之間卯月二日染筆同六日書

寫之功訖催馬樂同相交書之

釋 蓮 空 七十七歲

一花 幕 記 寫 一 冊

長純朝臣 編

此篇ハ應永十三年正月廿九日ヨリ二月五日ニ至ル迄後光嚴院三十三回御佛事法花懺法ノ御嚴儀ニシテ記スル處奏樂ノ規式等イト詳ニ載ス此節主上並准后ニモ笙ヲ吹シメ給ヒシ事アリ

一殘 夜 抄 寫 一 冊

孝道 撰 一名迷路抄ト號ス

人の親の心は闇にあらね共子を思ふ道に迷ひぬるかな

此抄管絃ノ記ニシテ其子ノ爲ニ殘セシ物ト見ヘタリ一ハ御遊二ハ舞樂三ハ式講四ハ十種供養五ハ人ニ物ヲ與フル事六ハ人ニ習事七ハ調子ノウツリ替リメ八ハ樂ノ問ノ事九ハ音ノ事十ハ物ヲ秘スベキヤウ十一ハ物ノダカヒメノ事十二ハ打物ノ事十三ハ樂器ノ

事ヲ委數ノベタリ

以近衛關白家基公自筆之本寫之

一樂 儼 雜 談 寫 三 冊

從五位下左近將監伯光眞 編

此記處々虫損多キノミナラズ上卷ノ首二章ヲ闕キ第三左右舞雜談事ヨリアリ第四左右樂雜談第五舞樂感應事第六樂器差別第七舞樂貝呼名事第八古樂七種差別第九細音聲事第十七國音事第十一舞曲新說出來事第十二舞樂古今相違事第十三舞秘曲等第十四秘樂事第十五管絃秘曲等第十六打物秘曲等第十八雜口傳

天福元年癸巳七月 日以自筆令書寫了 正六位上行左近衛將監伯宿禰近眞撰之

卷中 打物案譜法 口傳記錄與書前同斷

文保元年丁巳八月日以自筆令書寫之

兼 秋

卷下 樂書ト題シ卷端ヲ闕キ蘇合章史ヨリ記ス

右件舞曲等於光季之流者殊雖爲嫡家之秘事依難背御命相傳之略記摘要所且所勘進之狀如件

建保五年八月

從五位下左近衛將監狛宿禰光眞上

一五 鼓 譜 寫 一 冊

此編ハ鞞鼓鉦鼓太鼓鷄婁一鼓楮鼓等ノ深秘說口傳ヲ書記ス五常樂譜ハ則房宿禰ノ傳羅陵王ハ狛光則ノ家說拔頭破ハ公兼ノ說舞人行則光時ノ云々及打方ノ秘書ヲ載ス

正四位上豊原朝臣倫秋藏書

一新撰樂道類集 寫 二 冊

正五位下玄蕃助太秦昌名撰

卷上 樂曲製傳記 壹越調曲廿一箇曲 沙陀調曲 十箇曲 平調曲廿一箇曲 性調曲四箇曲

大食調曲十箇曲 水調曲四箇曲 盤涉調曲十九箇曲 乞食調曲五箇曲

卷下 黃鐘調曲十五箇曲 雙調曲四箇曲 高麗壹越調曲廿一箇曲 高麗平調曲一箇曲 高麗

麗双調曲四箇曲 秘曲類 絕樂曲類 凡十一調都合五十一曲

一問 襄 錄 寫 一 冊

丹波並河良弼 著 元祿戊寅仲冬望漢字自叙

曲調 壹越調曲^{廿四ノ内}今^五沙陀調曲^{十四ノ内}今^一雙調曲^五平調曲^{廿九ノ内}今^三道調曲^{廿ノ内}今^七大食調乞食調

性調曲^{六ノ内}今^五黃鐘調曲^{十五ノ内}今^四水調曲^{四ノ内}今^一盤涉調曲^{十七ノ内}今^七角調曲^{三ノ内}今^三高麗樂曲^{十三}

六ノ内存章樂目 詩賦 樂每ニ其褒貶ヲ記ス享保九年五月十八日逸竹齋小跋

一鳳 鳴 譜 寫 一 冊

簫ノ譜ニシテ壹越調十五平調十八雙調十二黃鐘調十盤涉調十大食調九以上七十四譜也

一樂 考 寫 一 冊

新井筑後守君美 著

此書ハ和樂唐樂胡樂高麗樂等ヲ造リシ時代ヨリ其名ノ起リシ原由ヲ諸書ニヨリテ正シ日本漢土ノ別ヲ明ニス豊原統秋ノ語ヲ多ク用ヒタリ之ハ白石諸說考七種ノ中ナリマ、

未詳ノ物アリ

一 琴學大意抄 寫

一 冊

物 茂卿 撰

琴ノ起リノ事琴ノ名義ノ事琴ヲ彈ビシ人ノ事琴匠ノ事琴ノ名所ノ事軫ノ事徽ノ事絃ノ事琴ノ調様ノ事琴七絃十三徽ノ定位ノ事三聲ノ事指ノ名ノ事右指法ノ事左指法ノ事譜ノ文字ノ事琴ノ廢レタル故ノ事享保壬寅四月廿八日狛氏ノ許へ贈ル由ノ奥書アリ又品絃ノ事ヲ附録ニス

一 神樂考 寫

一 冊

著者知ラズ

神樂三探物歌十五大前張五小前張十二星三弓立 朝倉 竈殿歌 酒殿歌 或說三 書目

其駒

以上其出所ヲ正シ微細ノ註ヲ下ス

一 神山長慶筆記 寫

一 冊

此書ハ寶永四年五月九日ヨリ十一月十八日ニ至ル迄ノ日次ニシテ禁中仙洞並宮方管絃御會及ビ寺社方ノ音樂等ニ出役セシ事共ヲ遂一ニ筆記ス堂上方ノ御相手タル事ハ勿論ニシテ主上仙洞ノ御所作マデモ録ス卷ニ前内府公ヨリ筆築銘瀧波被銘之詠歌御添被進之此管甲斐守近純へ被仰付候新管也

かけ高き山の岩をもくたくかと雲に聲してひやく瀧浪

一 舞樂傳記 寫

二 冊

從四位下伯耆守狛近家 撰

此書上卷ハ舞曲家傳記ト題シ舞曲ノ作者舞人ノ事裝束ノ事ヲ記ス

右舞曲者參校家傳之舊記粗謹注畢

正徳元年辛卯六月二日

從四位下伯耆守狛宿禰近家

下卷ハ樂並管絃鼓等傳記ト題シ其事ヲ悉詳ニス

一樂說紀聞 附樂器圖 寫 二帖

浩瀾松田 健 撰 享保癸卯三月下旬林大學頭僖甫序

此書ハ酒井小濱侯ノ命ニ依リ其臣松田氏倭漢樂書ノ中ヨリ抄出シ樂官山井主膳正景豊ト論定撰述シ以テ呈シ圖ハ加藤宗碩筆タリ卷ノ上中華ニテ樂ノ事日本ヘ樂ノ傳來ノ事樂ノ調子ノ事律呂ノ事樂曲ノ名ノ事亂聲並振舞ノ事公家ニテ樂ヲ業トシ給フ家ノ事地下樂人家業ノ事和琴ノ事琵琶ノ事箏ノ事羯鼓ノ事三鼓ノ事太鼓ノ事鉦鼓ノ事笙ノ事篳篥ノ事横笛ノ事箏ノ事拍子ノ事琴ノ事祝敵ノ事舞樂ノ器並腹ノ事樂器ヲ入ル袋ノ事本朝用ヒザル樂ノ事卷ノ下樂器譜ノ事朗詠並披講ノ事神樂並催馬樂ノ事五節舞ノ事高麗樂ノ事御遊並舞樂ノ事樂器名物ノ事奥ニ此書ヲ呈スルノ目錄アリ

一吉野吉水院寶庫樂書 寫 一冊

卷首二行闕奥又所々欠タリ樂道ノ事種々ヲ記ス

寶永二年五月廿一日

太 秦 昌 倫

一樂曲訓法 寫 一冊

正五位下飛驒守安倍季尙 編

卷端漢字ノ自叙アリ此編左樂一百十高麗樂三十五總テ百四十篇ノ名法ヲ萬葉ノ字例ヲ以テ記ス

延享丁卯孟春

一樂家錄 寫 五十冊

飛驒守安倍季尙 撰

此編ハ樂道ノ事大概ヲ盡ク錄シ且ツ歷世寺社ニ於テ執行セラレシ樂會ノ次第諸家ノ記錄中ヨリ抄出シ圖繪ヲ加ヘ其意ヲ詳ニシ又附錄ニ樂面ノ圖ヲ載タル本アリ流布本ニハナシ樂道必用ノ書コレニ過タルハナカルベシト云々

一興福寺延年舞式 寫 一冊

並圖延年連事